令和５年度
自動車事故による高次脳機能障害者の方に向けた
「社会復帰促進事業」
好事例集

令和７年３月

物流・自動車局　保障制度参事官室

国土交通省

はじめに

- 高次脳機能障害特有の症状として、社会的行動障害や記憶障害がありますが、適切なリハビリテーションを受けることで社会復帰につながる可能性があります。 一方、頭部外傷を治療する病院や自立訓練を提供する事業所はあるものの、入院中は患者にとって守られた環境下での生活となるため、高次脳機能障害が概して目立たず、発見されないことがあるほか、高次脳機能障害に理解のある事業所も多くない状況にあります。また、高次脳機能障害の発見が遅れる場合や適切な自立訓練を受けられず、高次脳機能障害を有する者が社会復帰できない状況も生じています。

- このため国土交通省では、自動車事故による高次脳機能障害者の社会復帰の促進に向けた方策を検討することを目的として、高次脳機能障害への十分な理解がある自立訓練事業所が行う、高次脳機能障害の把握から自立訓練、地元復帰まで切れ目のないサポートの取り組みを支援するモデル事業（社会復帰促進事業）を令和４年度に４事業者、令和５年度に６事業者、令和６年度に８事業者において実施しております。

- 今般、令和５年度の６事業者における取組を好事例集としてとりまとめましたので、ご紹介します。

- 今後、これらの事例を参考にして、自動車事故被害者を支える地域における関係者間のネットワークの構築、高次脳機能障害への理解促進、高次脳機能障害に合わせた自立訓練の提供の取組が縦横に展開されることを期待しております。

自立訓練事業所（機能訓練・生活訓練）において行われるモデル事業において、以下の３つの取組を実施

1. ネットワーク構築

高次脳機能障害に対する医学的な評価を行う病院と退院後に通所が想定されるモデル事業を行う自立訓練事業所とのネットワークを構築することにより、病院と事業所がそれぞれ得意とする観点から、自動車事故による高次脳機能障害者の評価を行い、協力して病院退院後のコーディネートを目指す取組。

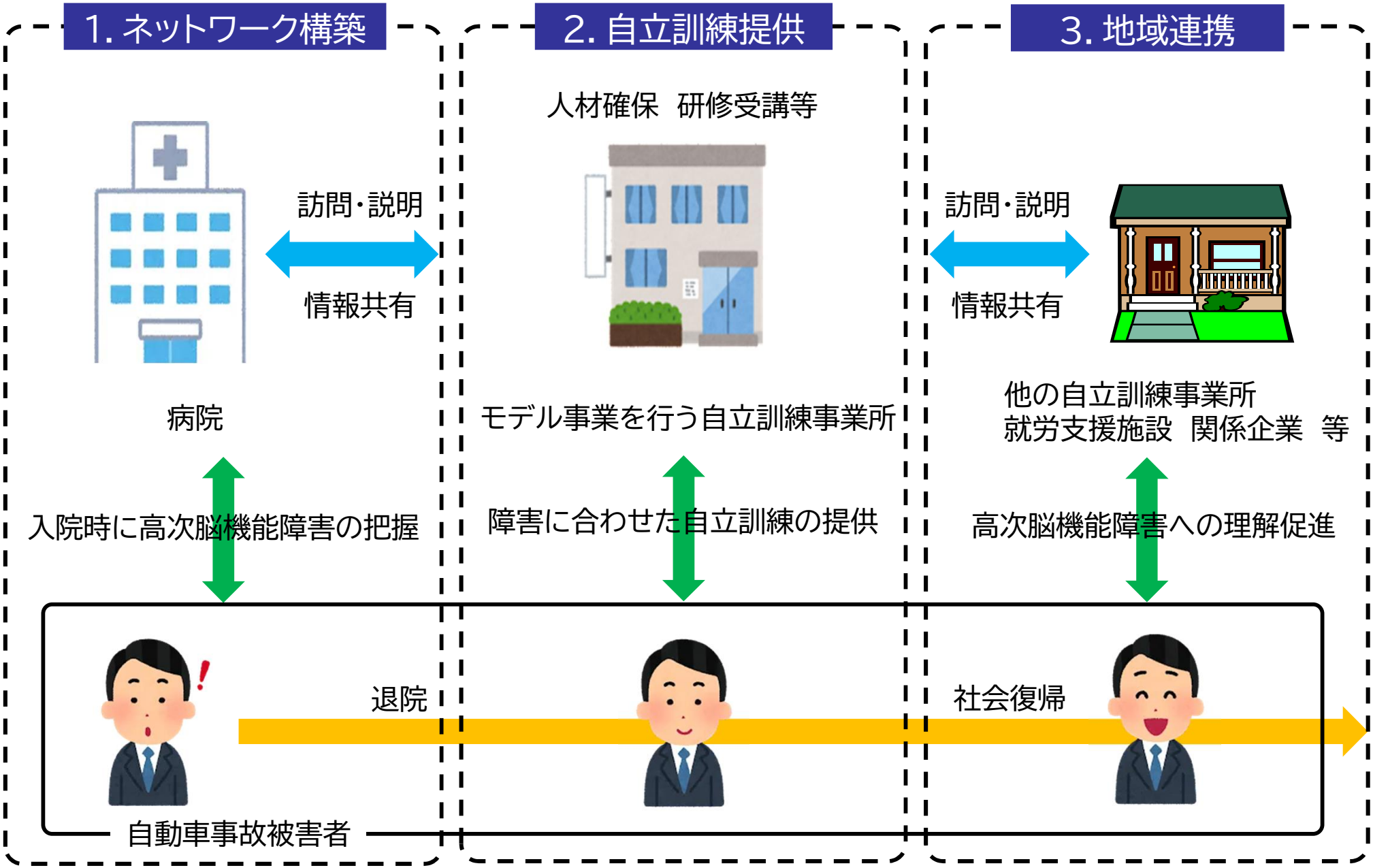
2. 自立訓練提供

モデル事業を行う自立訓練事業所において、高次脳機能障害に対応できる専門的知識を有する者による機能訓練・生活訓練を提供できるよう安定的な人材確保及び職員の研修等の受講によるスキルアップを目指す取組。

3. 地域連携

モデル事業を行う自立訓練事業所とその地域における他の自立訓練事業所や就労支援施設、関係企業と連携することにより、高次脳機能障害者の地域における生活への円滑な移行を目指す取組。

モデル事業（社会復帰促進事業）の概要



モデル事業者の概要

（令和４年度より実施）

千葉県千葉リハビリテーションセンター　障碍者支援施設　更生園

所在地：千葉県千葉市緑区誉田町1-45-2
運営法人：社会福祉法人千葉県身体障害者福祉事業団
提供サービス：
自立訓練（機能訓練・生活支援）
就労移行支援
就労定着支援
施設入所支援
短期入所

職員数：40名（常勤換算35名）

名古屋市総合リハビリテーションセンター

所在地：愛知県名古屋市瑞穂区弥富町字密柑山1-2
運営法人：社会福祉法人名古屋市総合リハビリテーション事業団
提供サービス：
自立訓練（機能訓練）
自立生活援助
施設入所支援
就労移行支援
就労定着支援

職員数：55名（常勤換算53.1名）

奈良県障害者総合支援センター　自立訓練センター

所在地：奈良県磯城郡田原本町大字多722
運営法人：社会福祉法人奈良県社会福祉事業団
提供サービス：
自立訓練（機能訓練・生活支援）
施設入所支援
短期入所支援

職員数：26名（常勤換算19.6名）

かがわ総合リハビリテーションセンター成人支援施設

所在地：香川県高松市田村町1114
運営法人：社会福祉法人かがわ総合リハビリテーション事業団
提供サービス：
自立訓練（機能訓練・生活支援）
就労移行支援
施設入所支援
就労定着支援
短期入所

職員数：34名（常勤換算32.6名）

詳細についてはQRコードより各施設のホームページにてご確認いただけます。

モデル事業者の概要

（令和５年度より実施）

広島県立総合リハビリテーションセンター　あけぼの

所在地：広島県東広島市西条町田口295-3
運営法人：社会福祉法人 広島県福祉事業団
提供サービス：
　自立訓練（生活訓練）
　就労移行支援
　生活介護
　施設入所支援
　短期入所

職員数：28名（常勤換算27.5名）

ダイアリー

所在地：埼玉県さいたま市見沼区南中野930-1
運営法人：株式会社ハート＆アート　共生・多機能型デイサービス　ダイアリー
提供サービス：
　自立訓練（機能訓練）、生活介護
　通所介護・介護予防通所介護
　共生型地域密着型通所介護
　児童発達支援事業
　放課後等デイサービス

職員数：11名（常勤換算7名）

詳細についてはQRコードより各施設のホームページにてご確認いただけます。

1．モデル事業者における病院とのネットワーク構築事例の概要

（令和４年度より実施）

千葉県千葉リハビリテーションセンター　障碍者支援施設　更生園

- 病院では、退院後の患者情報が無く社会参加の評価が困難であることから、引き続き病院に対して「地域連携シート」を活用した情報共有を実施。
- これにより、病院は今後の治療方針や地域移行を決める際の情報を入手できるようになり、患者の社会復帰・退院後の社会参加イメージを持つことができるようになった。
- 令和5年度は「一貫した連携パス」及び「地域連携シートの内容」の検証を行った。

名古屋市総合リハビリテーションセンター

- 引き続き、自立訓練施設のスタッフが病院を訪問し、直接入院患者に退院後の自立訓練に関する相談を受ける「退院後フォローアップ支援」を実施することで、病院側のメリットを創出。
- 引き続き、自立訓練施設のスタッフが病院退院後の患者からの相談を対応し、患者ご本人の同意の下、病院側の希望に応じて「退院後フォローアップ支援」の結果を病院へフィードバックした。

奈良県障害者総合支援センター　自立訓練センター

- 県の高次脳機能障害支援体制検討委員長（専門医）より、県における高次脳機能障害の認知度が低いため普及・啓発を中心に活動すべきと助言を受けて、引き続き、「認知度向上のためのリーフレット」を作成し、県内の医療機関へ配布。
- 令和5年度は新たに、名刺サイズの事業紹介カードを作成し、外来カウンター等の患者の目に付く場所への設置を依頼。
- 高次脳機能障害の基礎知識に関する研修会を開催。

かがわ総合リハビリテーションセンター成人支援施設

- 病院では患者に対する就労支援、運転再開支援の必要性を感じていることから、引き続き、自立訓練施設で受けることができる支援をまとめた「PR用チラシ」を作成。
- 医療機関のスタッフ等向けに、自立訓練、就労移行支援事業及び運転再開支援について施設見学会、また、回復期リハビリテーション病院から相談に繋がったケースにおける事例検討会を実施。

1．モデル事業者における病院とのネットワーク構築事例の概要

（令和５年度より実施）

広島県立総合リハビリテーションセンター　あけぼの	ダイアリー
● 併設の広島県高次脳機能センター職員とともに県内全域の回復期病院を訪問、高次脳機能障害者に対する専門的医療・福祉サービスの説明などを行い，理解促進及び関係強化に努めた。 ● 回復期病院スタッフ（MSW・リハ職）に当施設へ訪問いただき、施設で実施している訓練の紹介、高次脳機能障害者支援に関する情報交換を行った。 ● 回復期病院等に対して当施設利用者の帰結報告を行う様式を整備した。	● 急性期病院や回復期病院の相談員、MSWは、障害福祉サービス（機能訓練）のことを知らない場合が多いため、医療機関への訪問等において、機能訓練をプレゼンし、既存の機能訓練のチラシを配布した。 ● 運転再開の希望が多いため、運転評価を実施している病院と連携し、医師の診断につながる支援の流れを構築。

1．モデル事業者における病院とのネットワーク構築事例

千葉県千葉リハビリテーションセンター　障碍者支援施設　更生園

「地域連携シート」について

●取組内容

1.40カ所の病院を訪問
（地域医療支援病院22、令和4年度の訪問病院のうち協力的な病院9、令和4年度退所者を紹介いただいた病院9）
（昨年度32ヵ所）

2.連携シートの改良
昨年度の課題（病院から地域の事業所まで連携できるよう一貫した連携バスが必要）に対し、連携パス及び連携シートの内容を検証するため以下を実施。

- ネットワーク構築支援として医療機関を訪問する際にリーフレットに併せて連携シートの見本を持参し意見を聴取
- 情報の整理、課題に対する背景の記載、利用者自己評価の記載、支援結果の数値化（FIM／SIM）等の改良を実施

●取組の課題・改善点

適切な情報量、資料の作成負担、自立訓練の成果・効果、SIMの示し方のさらなる検討が必要。

1．モデル事業者における病院とのネットワーク構築事例

千葉県千葉リハビリテーションセンター　障碍者支援施設　更生園

障害福祉サービス地域連携シート

作成日	2024/1/1		
フリガナ	コウセイ　タロウ	生年月日	1975/10/1
年齢	48	性別	男
氏名	更生　太郎	住所	千葉市緑区常田町1丁目45番2
電話番号	XXX-XXX-XXXX		

基本情報

疾患・傷病名	交通事故による頭部外傷	発症日	2022/9/1

身体：☑右片麻痺　☐左片麻痺　☐四肢麻痺　☐両上肢麻痺　☐両下肢麻痺　☐体幹機能　☐感覚障害　☑運動障害　☐運動失調　☐摂食障害　☐排泄障害　☐関節拘縮　☐筋力低下　☐網膜　☐音声・言語障害　☐視力・視野障害　☐呼吸・循環器障害　☐その他

高次脳：☑記憶　☑注意　☑遂行機能　☑病識欠落　☐失認　☐失行　☑易疲労　☐発動性低下　☐感情失禁　☐固執性　☐抑制低下　☐抑うつ　☐失語　☐半側空間無視　☐依存性・退行　☐社会的行動障害　☐その他

保険種別	☐国保　☐社保　☐共済　☐労災　☑生活保護　☑自賠責・第三者行為　☐その他
年金	☐認定済み　☐申請中　☑症状未固定　☐非該当
障害支援区分	なし　訓練給付期限　2021/12/31
身障手帳	未申請
精神手帳	未申請
要介護度	非該当
キーパーソン	更生　一郎　電話番号　XXX-XXX-XXXX　関係　兄
紹介元	○○○○医療センター　担当　○○○　様

帰結情報

地域支援機関	×××相談支援事業所		
地域医療機関	○○○○医療センター		
生活拠点	☐在宅⇒	☐配偶者　☐子供　☐その	☐単身
	☑施設⇒	種別・名	ム／ハイム○○○
日中活動	障害福祉	種別・名	就労継 支援事業所／○○○作業所
	介護保険	種別・名	なし
	医療	種別・名称	なし
	就労	種別	未就労
	その他	種別	地域サークル／ピアサポート活動

ADL・IADL情報

日常生活動作

移乗	☑自立	☐見守り	☐一部介助	☐全介助	特記	公共交通機関利用可
移動	☑自立	☐見守り	☐一部介助	☐全介助	特記	
食事摂取	☑自立	☐見守り	☐一部介助	☐全介助	特記	
整容	☑自立	☐見守り	☐一部介助	☐全介助	特記	
入浴	☑自立	☐見守り	☐一部介助	☐全介助	特記	
更衣	☑自立	☐見守り	☐一部介助	☐全介助	特記	
排泄方法	日中	トイレ	夜間	トイレ	特記	
尿意	☑あり	☐なし	☐不明確	特記		
便意	☑あり	☐なし	☐不明確	特記		
意思伝達	☑自立	☐見守り	☐一部介助	☐全介助	特記	
危険行動	☑なし	☐あり	特記			

特記事項

調理師として働いていたが、交差点でトラックにはねられ脳挫傷を受傷。退院後にオーダーが覚えられなかったり、作り方をわすれたりといったことが変だと感じていた。退職済み。
家族は県外にいるが頻回な対応は困難な状況で単身生活をしていた。経済的には預貯金なく、事故後は生活保護を受給。事故補償について弁護士に相談中。医師からは身体機能的には単身生活可能だが、高次脳機能障害の影響が強く、社会復帰の為には今後の支援の必要との判断。病識はあり、今後の支援の必要性は本人も感じている。毎日通所は難しいと感じている。週数回が現実的。

千葉県千葉リハビリテーションセンター　障害者支援施設更生園

支援経過

支援事業	機能訓練事業	利用形態	通所利用				
利用開始日	2021/1/7	利用終了日	2021/8/31	236	日	約 7.8	ヶ月

ご本人の意向	ご家族の意向
・覚えることが苦手になっているので改善したい ・なにかしらの仕事ができるようになりたい	・安心して一人暮らしができるようになってほしい

支援の到達目標（長期目標）	・安心安全な地域生活が継続できる力を身に着けて頂く。 ・継続した社会参加（仕事）ができるような環境設定を行う。
課題	・心身状況の理解と管理 ・作業能力の向上と生活リズムの獲得

FIM	入所時	ADL	55	認知	24	合計	79		
	退所時	ADL	69	認知	22	合計	91		
SIM	入所時	生活項目平均	2.86	参加項目平均	3.6	共通項目平均	4	合計	42
	退所時	生活項目平均	4.14	参加項目平均	5	共通項目平均	5	合計	59

計画日	支援方針（短期目標）	支援結果
2021/1/7	ご本人の疾病と障害を理解し、ニースに対する課題把握を行う。	
2021/2/1	生活リズムをリズムを獲得し、プログラム体験から自身の得意・不得意について気付く。	自立訓練の利用目的を十分に把握されていなかったが、生活全般を振り返りながら訓練プログラムをこなすことで目的意識を持てるようになりました。
2021/5/1	生活リズムと障害の代替手段の獲得を支援し、安定した地域生活スタイルを獲得する。	成功体験・失敗体験を重ねることで、高次脳機能障害への認識が高まり「障害について知りたい」との希望が聞かれるようになりました。
2021/7/1	社会参加として日中活動ができるよう本人と地域支援者と協力し活動先を検討する。	メモリーノートを活用し自身でスケジュール管理ができるようになったことで、遅刻や無断欠席をすることが少なくなりました。
2021/8/31		就労継続A型やB型事業所の見学・体験を支援した結果、本人が希望される飲食関係のB型事業所への意向が決まりました。

自己評価	支援の満足度	☐十分満足　☐やや満足　☐普通　☑やや不満　☐不満 PT，OT訓練をもっとやって欲しかった。
	帰結の満足度	☐十分満足　☑やや満足　☐普通　☐やや不満　☐不満 就職までのステップアップができた。
支援結果	訓練プログラムを通して様々な経験をして頂いた結果、自身の得意・不得意を体験できたことによって高次脳機能障害に対する認識が高まりました。しかし限られた期間での支援ということもあり理解が十分でなく、継続したフォローが必要です。代償手段に関しても必要性は認識しているものの、完全な定着まではいかず、支援者による確認は継続したほうが良いと思われます。 健康管理や生活リズムに関しては不安が強いことから、管理の面を含めて作業所近くのグループホームに入居することとなりました。	

※ 障害福祉サービス連携シートは退園時の状況報告として退園先の支援機関及び主治医に情報提供をさせて頂きます。
また計画相談担当者及び更生園への紹介元機関へ情報提供される場合があります。

千葉県千葉リハビリテーションセンター　障害者支援施設更生園

見本

1．モデル事業者における病院とのネットワーク構築事例

名古屋市総合リハビリテーションセンター

「退院後フォローアップ支援」について

●取組の背景

病院との関係づくりを考えたときに「ネットワークを作りたい」という自立訓練所側の思いだけでは、病院側が繰り返し訪問対応のための時間を設けることが現実的には難しいため、病院側のメリットを創出する必要があった。一方、現状認識が不十分なまま退院していく患者については、急性期・回復期とも退院後の生活に不安を抱いており、そのニーズに応えるため、退院後のフォローを実施することとした。

●取組の効果

1. 令和4年度の5病院から2病院を追加し、引き続き、自立訓練所のスタッフが患者からの病院退院後の相談に対応し、患者ご本人の同意の下、病院側の希望に応じて「退院後フォローアップ支援」の結果を病院へフィードバックした。

2. 退院後フォローアップ支援での訪問6件のうち、自立訓練を利用する予定のケースは1件であり、当センターを受診し高次脳機能障害支援センターへつながったケースは1件、それ以外は退院後フォローアップ支援を継続中。

●取組の課題・改善点

取組みの結果、自立訓練の利用者が急増し、待機者が出るなど、ニーズに対応しきれない状況が生まれてきている。

次年度に向けては、医療機関のニーズがある「障害福祉サービスの現状」「障害福祉サービスの活用法」「障害者雇用の現状」「障害年金・手帳」などの情報について、医療機関へ訪問した際にミニ研修会実施による対応も検討。

名古屋市総合リハビリテーションセンター

高次脳機能障害のある方に向けた

退院後フォローアップ支援のご案内

高次脳機能障害のある方からの退院後の生活・就労に関するご相談やお悩みに対し、リハビリセンター職員が対応し、情報提供や助言等を行います。

利用者（対象者）

自立訓練の利用が推奨される、以下のすべての要件に当てはまる方

❶高次脳機能障害の診断を受けている方
❷愛知県内の医療機関に入院・通院中の方
❸退院後の居住予定地が愛知県内の方

※頭部外傷、脳血管障害、低酸素脳症、脳炎、脳腫瘍の方々が対象です。

期間

原則、受傷・発症日から1年6ヶ月の間

※リハビリセンターの他のサービスの利用を開始した場合、契約は終了します。

費用

無料

※相談等にかかる電話代や交通費等は除きます。

支援内容

●相談対応・情報提供・助言

利用者様からの「退院後の生活・就労へのスムーズな移行のための相談」に対応するとともに、必要に応じて情報提供や助言等を行います。

（例）・生活（居住・移動・外出等）　・日中活動（障害福祉サービスの利用等）
・就労（復職・新規就労等）　・所得補償（障害年金等）　等

●定期連絡

フォローアップの一環として、定期的に利用者様に連絡をし、状況確認を行います。

（例）3ヶ月ごと等

支援方法　電話や面談（利用者様のご自宅やリハビリセンター等にて）等

退院後フォローアップ 支援の流れ

支援を希望される方、質問のある方がいたら…：まずは入院・通院されている医療機関のスタッフの方から、リハビリセンターにご連絡ください。利用相談の日程調整をいたします。

利用相談・説明、契約：リハビリセンター職員が、利用者様が入院中の医療機関等にお伺いして、ご相談に応じたり、説明させていただきます。その後、支援を希望される場合は、利用者様とリハビリセンターとの間で、契約を結びます。

支　援

結果報告：利用者様が入院していた医療機関が希望する場合かつ利用者様が承諾した場合は、医療機関に支援の結果を報告をいたします。

1．モデル事業者における病院とのネットワーク構築事例

奈良県障害者総合支援センター　自立訓練センター

「認知度向上のためのリーフレット」等について

- オンライン利用相談申込フォーム
  引き続き、病院及び患者等から相談を受け付ける手段として新たにスマホなどから利用できる「オンライン利用相談申込フォーム」を作成し、利用促進に繋げる取組を実施。相談内容により、併設の高次脳機能障害支援センターに繋ぐなど患者に必要な支援を実施。
- リーフレット
  病院職員から患者に対して自立訓練や総合相談支援を紹介してもらえるようリーフレットを作成し、病院病院訪問時に配布。
- 事業紹介カード（新規）
  病院の窓口に備え置いてもらえるよう、名刺サイズの事業紹介カードを作成し、病院訪問時に配布した。
- 研修会
  高次脳機能障害の基礎知識及び症例報告について研修会を実施。

● 取組の課題・改善点
定期訪問の方法や頻度を再考する必要がある。

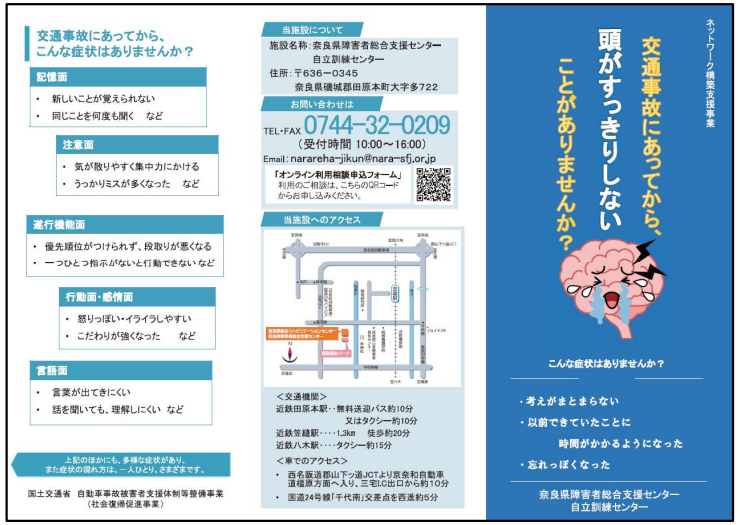
事業紹介カード（二つ折り）

カード表面

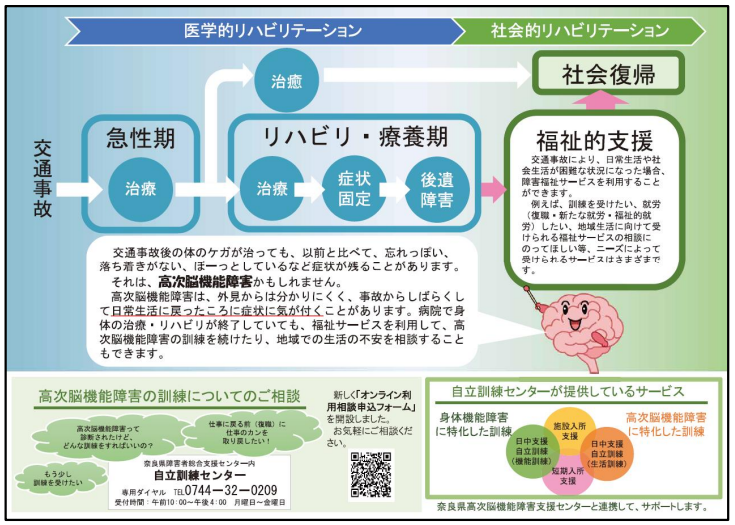
カード内面

カード裏面

A4三つ折りリーフレット表面



A4三つ折りリーフレット裏面



1．モデル事業者における病院とのネットワーク構築事例

かがわ総合リハビリテーションセンター成人支援施設

医療機関及び患者向けのチラシ作成

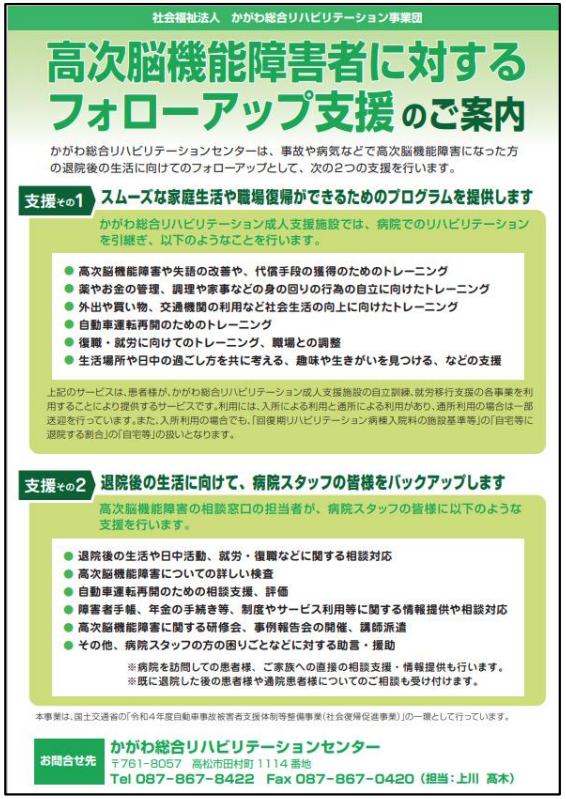
・　急性期・回復期病院から退院した高次脳機能障害者に対して適切な自立訓練を提供するとともに、高次脳機能障害の評価や患者退院後生活や就労に関する相談対応によるバックアップを行うことを明記したチラシを作成し医療機関に配布。

「医療機関向け研修会・見学会」について

・　医療機関のスタッフが、患者の退院後の生活や社会リハビリ・職業リハビリの具体的イメージが持てるよう、自立訓練、就労移行支援事業、運転再開支援についての施設研修見学会を実施。回復期リハビリテーション病院退院後に相談窓口に繋がったケースについて、事例検討会を実施した。

● 取組の課題・改善点
連携経験のない医療機関のMSW、看護師、療法士に対して正確に自立訓練の必要性を理解してもらう必要がある。

【A4サイズ病院向けPRチラシ】


社会福祉法人　かがわ総合リハビリテーション事業団

高次脳機能障害者に対するフォローアップ支援のご案内

かがわ総合リハビリテーションセンターは、事故や病気などで高次脳機能障害になった方の退院後の生活に向けてのフォローアップとして、次の2つの支援を行います。

支援その1　スムーズな家庭生活や職場復帰ができるためのプログラムを提供します

かがわ総合リハビリテーション成人支援施設では、病院でのリハビリテーションを引継ぎ、以下のようなことを行います。

- 高次脳機能障害や失語の改善や、代償手段の獲得のためのトレーニング
- 薬やお金の管理、調理や家事などの身の回りの行為の自立に向けたトレーニング
- 外出や買い物、交通機関の利用など社会生活の向上に向けたトレーニング
- 自動車運転再開のためのトレーニング
- 復職・就労に向けてのトレーニング、職場との調整
- 生活場所や日中の過ごし方を共に考える、趣味や生きがいを見つける、などの支援

上記のサービスは、患者様が、かがわ総合リハビリテーション成人支援施設の自立訓練、就労移行支援の各事業を利用することにより提供するサービスです。利用には、入所による利用と通所による利用があり、通所利用の場合は一部送迎を行っています。また、入所利用の場合でも、「回復期リハビリテーション病棟入院料の施設基準等」の「自宅等に退院する割合」の「自宅等」の扱いとなります。

支援その2　退院後の生活に向けて、病院スタッフの皆様をバックアップします

高次脳機能障害の相談窓口の担当者が、病院スタッフの皆様に以下のような支援を行います。

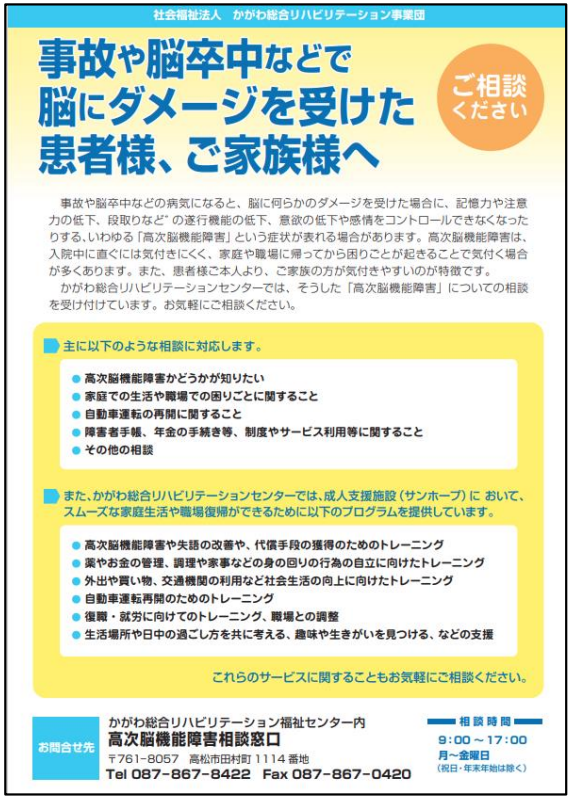
- 退院後の生活や日中活動、就労・復職などに関する相談対応
- 高次脳機能障害についての詳しい検査
- 自動車運転再開のための相談支援、評価
- 障害者手帳、年金の手続き等、制度やサービス利用等に関する情報提供や相談対応
- 高次脳機能障害に関する研修会、事例報告会の開催、講師派遣
- その他、病院スタッフの方の困りごとなどに対する助言・援助

※病院を訪問しての患者様、ご家族への直接の相談支援・情報提供も行います。
※既に退院した後の患者様や通院患者様についてのご相談も受け付けます。

本事業は、国土交通省の「令和4年度自動車事故被害者支援体制等整備事業（社会復帰促進事業）」の一環として行っています。

お問合せ先　かがわ総合リハビリテーションセンター
〒761-8057　高松市田村町 1114 番地
Tel 087-867-8422　Fax 087-867-0420（担当：上川　高木）

【A4サイズ患者・ご家族病院向けPRチラシ】


社会福祉法人　かがわ総合リハビリテーション事業団

事故や脳卒中などで脳にダメージを受けた患者様、ご家族様へ

ご相談ください

事故や脳卒中などの病気になると、脳に何らかのダメージを受けた場合に、記憶力や注意力の低下、段取りなど"の遂行機能の低下、意欲の低下や感情をコントロールできなくなったりする、いわゆる「高次脳機能障害」という症状が表れる場合があります。高次脳機能障害は、入院中に直ぐには気付きにくく、家庭や職場に帰ってから困りごとが起きることで気付く場合が多くあります。また、患者様ご本人より、ご家族の方が気付きやすいのが特徴です。
かがわ総合リハビリテーションセンターでは、そうした「高次脳機能障害」についての相談を受け付けています。お気軽にご相談ください。

主に以下のような相談に対応します。

- 高次脳機能障害かどうかが知りたい
- 家庭での生活や職場での困りごとに関すること
- 自動車運転の再開に関すること
- 障害者手帳、年金の手続き等、制度やサービス利用等に関すること
- その他の相談

また、かがわ総合リハビリテーションセンターでは、成人支援施設（サンホープ）に おいて、スムーズな家庭生活や職場復帰ができるために以下のプログラムを提供しています。

- 高次脳機能障害や失語の改善や、代償手段の獲得のためのトレーニング
- 薬やお金の管理、調理や家事などの身の回りの行為の自立に向けたトレーニング
- 外出や買い物、交通機関の利用など社会生活の向上に向けたトレーニング
- 自動車運転再開のためのトレーニング
- 復職・就労に向けてのトレーニング、職場との調整
- 生活場所や日中の過ごし方を共に考える、趣味や生きがいを見つける、などの支援

これらのサービスに関することもお気軽にご相談ください。

お問合せ先　かがわ総合リハビリテーション福祉センター内
高次脳機能障害相談窓口
〒761-8057　高松市田村町 1114 番地
Tel 087-867-8422　Fax 087-867-0420

相談時間
9:00～17:00
月～金曜日
（祝日・年末年始は除く）

【医療機関等向け研修会チラシ】

令和5年度 高次脳機能障害支援関係職員研修会

第1回　令和5年9月4日　（月）9：00～15：00
第2回　令和5年9月25日（月）9：00～15：00

※講義、見学とも同じ内容となっております。
都合の良い日程でお申込みください。

【内容】
・高次脳機能障害についての基礎知識と利用できる制度紹介、事例紹介、連携について等の講義
・当センターの取り組み紹介　施設見学
（自立訓練・就労移行支援、自動車運転評価）

今回は施設見学も同時開催します。
この機会にぜひご参加ください。

【問い合わせ先】
かがわ総合リハビリテーション福祉センター
（高松市田村町1114番地）
TEL　087-867-7686　担当：松村

1．モデル事業者における病院とのネットワーク構築事例

広島県立総合リハビリテーションセンター　あけぼの

病院訪問の実施

●取組の背景・概要

急性期及び回復期病棟からの高次脳機能障害者は，主に県立総合リハビリテーションセンター（リハセンター）で受け入れ、退院後に自立訓練所にて地域移行・社会復帰を目標に生活訓練等を行っているが、病院から自立訓練所への患者紹介が少ないため、リハセンターのコーディネーターと共に県内全域の回復期病院を訪問し、退院後もリハセンター内の福祉施設で引き続き医療と連携した支援や訓練が提供できることが特色であることを，パンフレットを渡して説明し，利用促進を図った。

●取組の効果

病院のMSWは，異動等により代わることがあるため、現任者に対してリハセンターのサービス全般の説明を行い、新たな関係づくりに努めた。福山リハビリテーション病院とは、訪問後に当施設に来訪いただき、グループ訓練の見学、高次脳機能障害者支援の情報交換を行った。今後、作業療法士を中心に具体的な連携を進め，自立訓練利用を前提とした患者紹介の増加を期待するところである。また、回復期病院等に対する、当施設利用者の「帰結報告」様式（右）を作成し、配布を開始した。

●取組の課題・改善点

医療機関のMSWに、転院先としてだけではなく、地域移行・社会復帰までの視点で，福祉サービスの利用を見据えた事業所としてリハセンターを活用してもらえるよう理解促進を図るとともに、患者の住む地域の社会資源の情報も共有できるよう取り組む必要がある。病院から介護保険サービスにつなぐのではなく障害福祉サービスにいかにしてつないでもらうかが課題。

1．モデル事業者における病院とのネットワーク構築事例

広島県立総合リハビリテーションセンター　あけぼの

【パンフレット】

○相談支援

支援コーディネーターが長期的な視点でニーズの把握からその解決に向け当事者や家族と一緒に考えます。

個別相談

高次脳機能障害に係る次のような相談に応じています。
- 医療受診に関すること
- 福祉サービスに関すること
- 日常生活での困りごと
- 医療補助，経済支援や事故補償に関すること

情報提供

高次脳機能障害に関する情報を収集し，提供しています。
- 医療・福祉制度に関する情報
- 後遺症認定に関する情報
- 高次脳機能障害に関する書籍の紹介

家族支援

当事者のみならず，ご家族の困りごとに関して，積極的に相談に応じています。

○リハビリテーション

個別作業療法，言語聴覚療法，心理カウンセリングの他に，高次脳機能障害に特化したプログラムを実施しています。

個別プログラム
- 認知機能回復・代替プログラム（注意・記憶・遂行機能課題）
- メモリーノート活用練習
- 認知行動療法的アプローチ
- ストレスマネージメント
- 家族への助言指導

グループプログラム
- 社会適応グループ
- 模擬就労グループ
- SST グループ
- 失語グループ
- 集団認知行動療法
- 問題解決的アプローチに基づいたグループ

○教育・啓発・調査研究

普及啓発

一般県民を対象に，高次脳機能障害の啓発活動を行います。
- 講演会，シンポジウムの開催
- パンフレットや資料の配布
- ホームページでの情報発信

専門研修

医療・福祉従事者を対象とした研修を実施します。

当事者・家族学習会

障害理解や対応法について，定期的に学習会を実施しています。

調査研究

高次脳機能障害の改善や救済につながる調査研究を行います。
- 実態調査，希望調査
- 高次脳機能障害研究

専門医療

医療と福祉が一体となって連続した支援を行います

専門医療から社会復帰支援まで高次脳機能障害に特化した連続的な支援を行います。
高次脳機能センタースタッフが，専門的な対応を行い，当事者や家族と一緒に考えます。

社会復帰

高次脳機能科

脳外傷，脳卒中，低酸素脳症などにより脳機能に障害を負われた方を対象に，外来診療を行います。高次脳機能障害等について，診断評価と治療を実施します。

画像診断（MRI）

神経心理学的検査

記憶障害，注意障害，遂行機能障害や社会的行動障害について，評価します。

入院病棟　40床

高次脳機能障害専門病棟として医療的リハビリテーションプログラムを実施します。医師，看護師，リハビリテーションスタッフ，公認心理師，支援コーディネーターがチームとなりアプローチします。

障害者支援施設
あけぼの

日中活動や施設生活を通じて社会生活力を高め，地域生活や就職・復職に向けた準備等，社会リハビリテーションを行う訓練施設です。
関係機関と連携しながら個別支援計画に基づき支援を行います。

地域生活支援

当事者やご家族のニーズに応じて，関係機関と連携し社会復帰を支援します。

就労・就学支援

職場や学校の担当者と相談し，調整を行います。必要に応じて，職場・学校の訪問も行います。

連携機関

県立総合精神保健福祉センター
広島障害者職業センター
広島障害者職業能力開発校
障害者就業・生活支援センター
いでした高次脳機能外来・デイケア
市町福祉相談窓口
当事者会，家族会
NPO 法人高次脳機能障害サポートネットひろしま
高次脳機能障害友の会ケ・セラ・セラ

【帰結報告様式】

令和　年　月　日

○○○○病院
地域医療連携室長 様

広島県立総合リハビリテーションセンター
障害者支援施設 あ け ぼ の
あけぼの長　高 橋　正
（ 公 印 省 略 ）

拝啓，時下ますますご清祥のこと，お喜び申し上げます。
平素より当施設の運営に際しましては格別のご配慮を賜り，お礼申し上げます。
このたび，貴院を退院した後に，当センターへの入院を経て，当施設をご利用いただきました方が，当施設のご利用を終了されましたので，下記の通りご報告させていただきます。
当施設といたしましては，貴院と情報を共有させていただくことで高次脳機能障害のある方へのより良い支援に繋がればと考えており，引き続き，連携させていただければ幸いです。
今後ともよろしくお願いいたします。

敬具

記

利 用 者：　○○　○○　様（昭和　年　月　日生・男性）
利用期間：　令和　年　月　日　～　令和　年　月　日（約○か月間）
利用サービス：　生活訓練・施設入所支援
進 路 先：　（住まい）障害者グループホーム「○○○○」
（広島市○区・包括型）
（日中活動）就労継続支援Ａ型事業所「○○○○」
（広島市○区・クリーニング業）
（支援機関）相談支援事業所「○○○○」
広島東障害者就業・生活支援センター
高次脳機能センター
（医療機関）○○病院
経　　過：　貴院退院後，県リハ高次脳機能センターに転院。約３ケ月間入院リハの後，あけぼの入所。身体面では短下肢装具を使用した杖歩行が定着しＡＤＬ面も安定。一方，高次脳機能面は，遂行機能面では代償手段獲得等による改善が見られたものの社会的行動障害が課題として残存。職場復帰は断念することになりましたが，上記のような形で地域での新生活をスタートされました。

以上

障害者支援施設　あ け ぼ の
〒739-0036　東広島市西条町田口 295-3
082－425－1455（代）　　担当：○○

1．モデル事業者における病院とのネットワーク構築事例

ダイアリー

病院訪問について

●取組の背景・概要
　急性期病院や回復期病院の相談員、MSWは、「第2号被保険者の高次脳機能障害の方々は介護保険サービスにつなげる」と考えており、障害福祉サービス（機能訓練）のことを知らない場合が多い。医療機関への訪問や「高次脳機能障害者支援に関する座談会」（令和5年12月開催）において、機能訓練をプレゼンし、既存の機能訓練のチラシを配布。退院を控えた高次脳機能障害者の退院先の一つとして当施設の理解を促した。また、運転再開の希望が多いため、運転評価を実施している病院と連携し、医師の診断につながる支援の流れを作った。

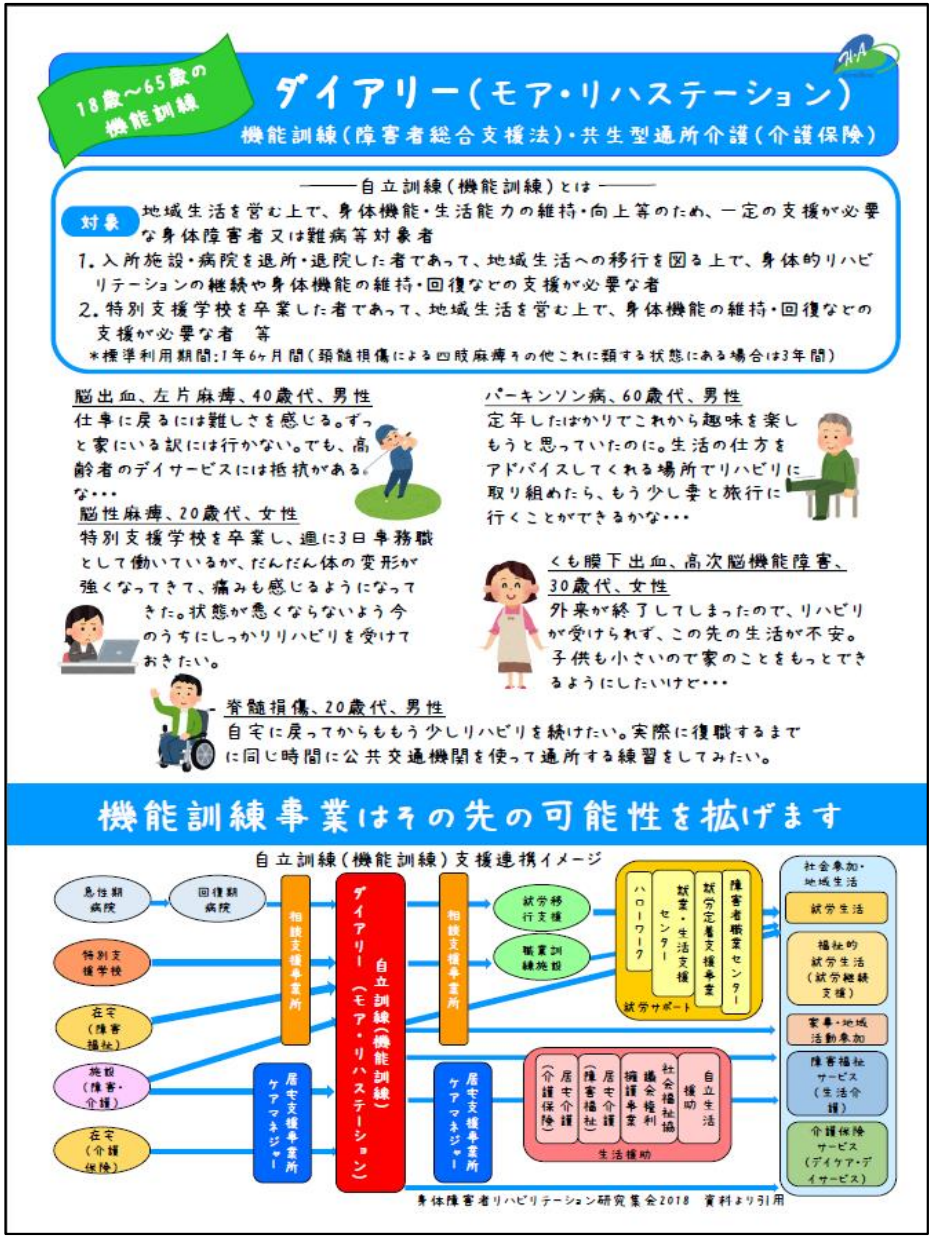
●取組の効果
　高次脳機能障害者であっても40歳を過ぎた脳血管障害の方々は介護保険しかないと考えていた病院が多く、「選択肢が増えた」、「連携したい」との意見が多く聞かれた。また、運転再開希望者4名のうち、1名が運転再開、3名が外来にて訓練を実施している。

●取組の課題・改善点
　さらに多くの病院の相談員、地域連携室に直接訪問し、機能訓練について説明する必要がある。また、運転再開のための病院との連携をスムーズに行うため、情報シートが必要であることが分かった。

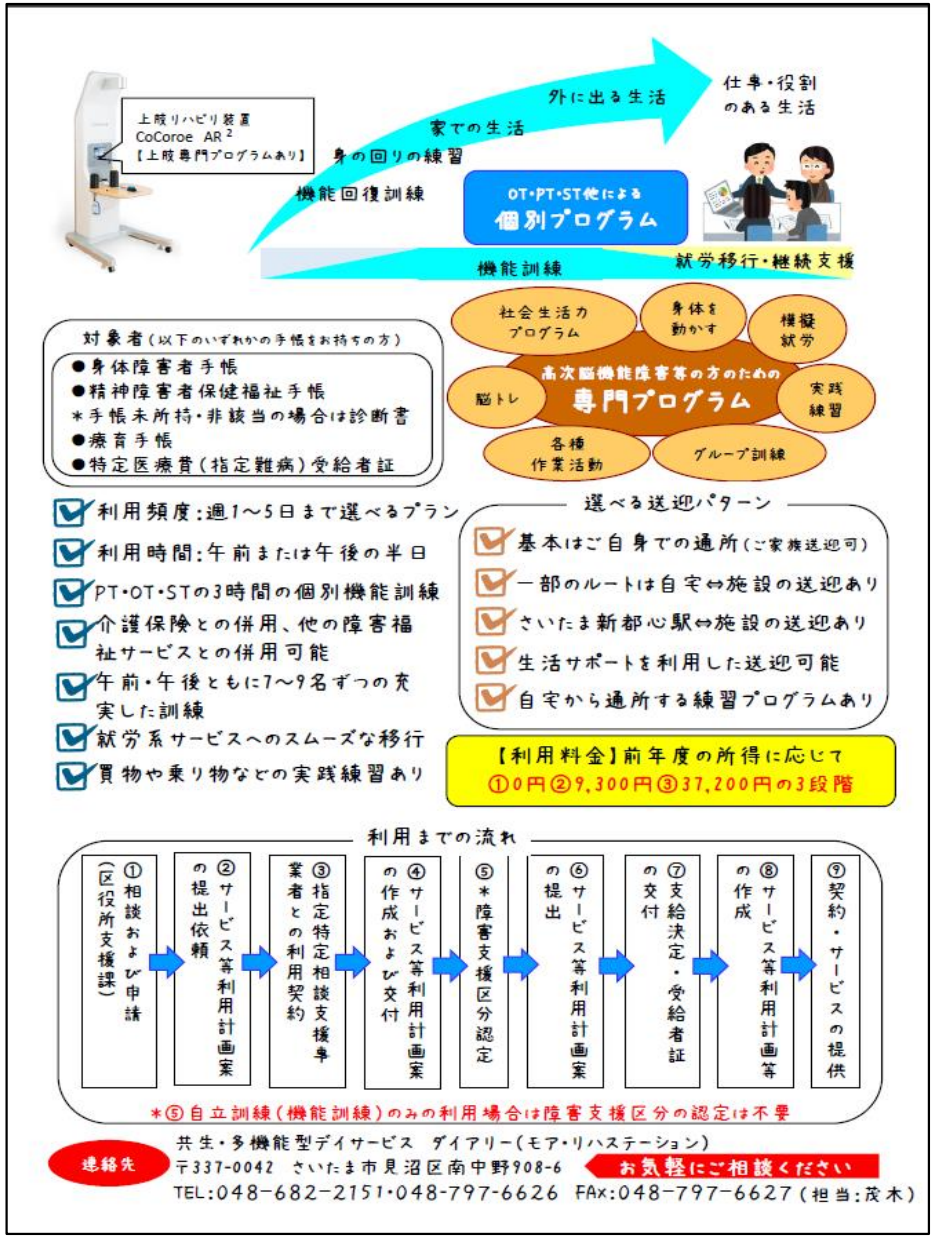
1．モデル事業者における病院とのネットワーク構築事例

ダイアリー

機能訓練チラシ表面



機能訓練チラシ裏面



2．モデル事業者における自立訓練提供事例の概要

（令和４年度より実施）

千葉県千葉リハビリテーションセンター　障碍者支援施設　更生園

- 引き続き、自立訓練の支援効果を測定し可視化することによって、効率的なプログラム提供を行う根拠となるよう、自立訓練事業退所者のSIMを帰結別に整理し、FIM数値と併せて比較検証を行った。

名古屋市総合リハビリテーションセンター

- 高次脳機能障害の特性を踏まえ、施設内ではなく、自宅及び居住地域へ訪問するいわゆるアウトリーチによるIADL（手段的日常生活動作）訓練を実施。
- 支援の質を均一にするため、昨年度に引き続きリハ専門職と支援員が共同してプログラムを実施。
  ①若者グループワーク
  ②遂行機能グループワーク
  ③STグループワーク
  ④外出グループワーク

奈良県障害者総合支援センター　自立訓練センター

- 引き続き、障害受容の獲得のため、特にスポーツ・レクリエーション（スポレク）を通じて障害への理解についてアプローチを実施。
- 自立訓練提供用のリーフレットについては、生活訓練と機能訓練の別で作成し、自立訓練の利用促進のため、自動車事故による高次脳機能障害の方の具体的な利用ケースを掲載した。

かがわ総合リハビリテーションセンター成人支援施設

- 訓練内容を実生活に反映させるため、令和5年度に自立訓練プログラム検証プロジェクトを立ち上げ、プログラム担当とケース担当がプログラム内の様子と日常生活の課題を共有することで、利用者の状況を共有。
- 他の自立訓練施設を視察し、プログラム内容、職員間連携の手段等について、プロジェクト内で共有し、導入できる内容について内部で協議。

２．モデル事業者における自立訓練提供事例の概要

（令和５年度より実施）

広島県立総合リハビリテーションセンター　あけぼの	ダイアリー
● 自立訓練提供にあたり、利用者の障害像やニーズに応じて①生活訓練グループ、②機能訓練グループ、③就労グループに分け、グループワークを実施。 ● 就労グループにおいて、復職希望者には、職場との調整や職場の希望する業務内容に即した実践的な訓練を実施するとともに、復職後の定着に向けたフォローを利用者と職場に対して実施。新規就労希望者には、多様な業務訓練や面接練習などを実施するとともに、関係機関との連携して、職場実習などの就職活動支援を実施。	● 高次脳機能障害の受け入れ先が少ない中で、言語聴覚士を増員し、定員14名から20名に引き上げて高次脳機能障害の方々への訓練の機会を増やした。 ● 高次脳機能障害は自分がどのようなことができるかをイメージしにくく、受入先の就労系事業所も障害特性を理解しにくいことから、就労系事業所の見学を実施。

2．モデル事業者における自立訓練提供事例

千葉県千葉リハビリテーションセンター　障碍者支援施設　更生園

社会的生活自立度評価(SIM)及び機能的自立度評価法(FIM)について

●概要
　昨年度に引き続き、自立訓練の支援効果を測定し可視化することによって、効率的なプログラム提供を行う根拠となるよう、自立訓練事業退所者のSIMを帰結別に整理し、FIM数値と併せて比較検証を行った。

●取組の成果
・対象者
　令和4～5年度に自立訓練事業所を退所した者で高次脳機能障害を有した50名
・帰結先
　就労(新規、復職)、復学、就労移行、就労継続A及びB、 生活介護、地域活動支援センター、介護デイサービス、訪問介護等
・結果
　社会に積極的に参加するための項目(人間関係、余暇活動、日中活動、制度活用)に関するプログラムの強化、開発が必要であることが判明

●取組の課題・改善点
　支援結果(帰結)とSIMデータの比較検証から、高次脳機能障害者の社会復帰目標に対する課題がある程度可視化されたが、各項目に対して、自立訓練にてどのようなプログラムを提供しているかの紐づけを行い効果測定をする必要がある。
　またデータ数が少ないことから整合性の検証が十分でないため、引き続きデータの蓄積と協力施設への依頼が必要と考える。

社会的生活自立度評価(SIM)の項目と採点基準

	項　目			点数 利用時	点数 終了前	SIM利得
毎日の社会生活を維持するための項目	1. 健康管理		必須			0
	2. 金銭管理		必須			0
	3. 身の回りの管理		必須			0
	4. 買い物(買い物先までの移動を除く)		必須			0
	5. 家事活動(調理含まず)		選択			0
	6. 調理		選択			0
	7. 生活のセルフマネジメント		必須			0
社会の一員として積極的に参加するための項目	8	(1)公共交通機関を利用しての外出 (2)自動車運転	1つを選択			0
	9. 人間関係		必須			0
	10. 仕事／学校		選択			0
	11. 余暇活動		必須			0
	12. 日中活動		必須			0
共通項目	13、制度・サービス活用		必須			0
	合計(10～91)					

※除外項目は斜線

採点基準(以下は目安である。具体的には各項目の採点基準を参照)

自立	継続自立	7点	安定性や対応力が高い自立レベル
	自立	6点	現段階で自立している場合 (店員や窓口担当等に問い合わせる等、通常ある人的資源の活用を含む)
部分的支援が必要	見守り	5点	(見守り、時々の促しや助言が必要)
	最小援助	4点	(75%以上自分で行う)
	中等度援助	3点	(50%以上75%未満自分で行う)
全面的な支援が必要	最大援助	2点	(25%以上50%未満自分で行う)
	全面援助	1点	(25%未満しか自分で行わない)

※7点、6点は、自助具の活用、自らが選択、利用、指示、調整して介助サービス等を利用する場合が含まれる
※実行状況の評価であるめ、利用者の意思や意欲は大いに加味される。能力はあるが実行の意思が低く声かけが必要な場合も5以下となる。

2．モデル事業者における自立訓練提供事例

名古屋市総合リハビリテーションセンター

グループワークの実施について

● 概要

高次脳機能障害の特性を踏まえ、施設内ではなく、自宅及び居住地域へ訪問するいわゆるアウトリーチによる動作獲得・定着を目指したIADL訓練を実施。対象層を絞ったグループワークを実施し、障害認識の促進及び補償行動の獲得の機会とする。

● 実施内容

昨年度から引き続き、リハ専門職と支援員が共同してプログラムを実施した。

①若者グループワーク（臨床心理士＋SW）　：学齢期の受傷により社会性が十分でない利用者へ自信づけをはかる

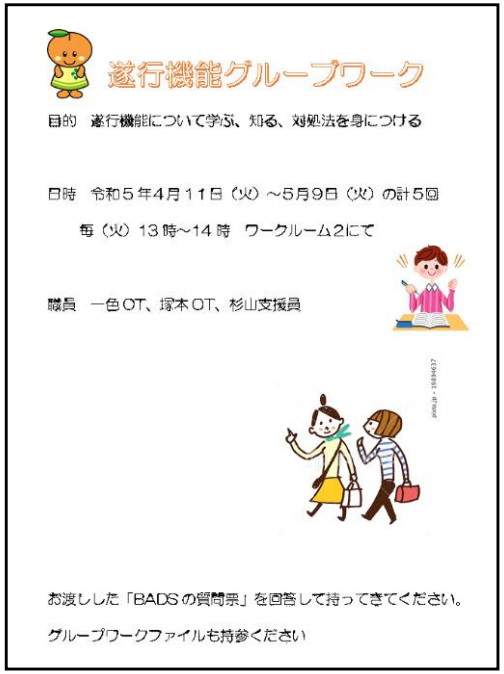
②遂行機能グループワーク（作業療法士＋SW）：遂行機能に関する講義と外出計画の立案、実施を行う

③ STグループワーク（言語聴覚士＋SW）　：失語症がある利用者が外出先で他者とコミュニケーションをとる

④外出グループワーク（理学療法士＋SW）　：車いす使用者の交通機関利用体験

● 取組の課題・改善点

引き続きケースワークと訓練プログラムを連動させるためにリハ専門職含めたスタッフと支援員との情報共有を密にし、利用者に対して効果的なアプローチができるよう進める。加えて、次年度以降は、プログラムの有効性について、SIM（社会生活の自立度評価指標）などの評価指標を活用して、検証する予定。



遂行機能グループワーク

目的　遂行機能について学ぶ、知る、対処法を身につける

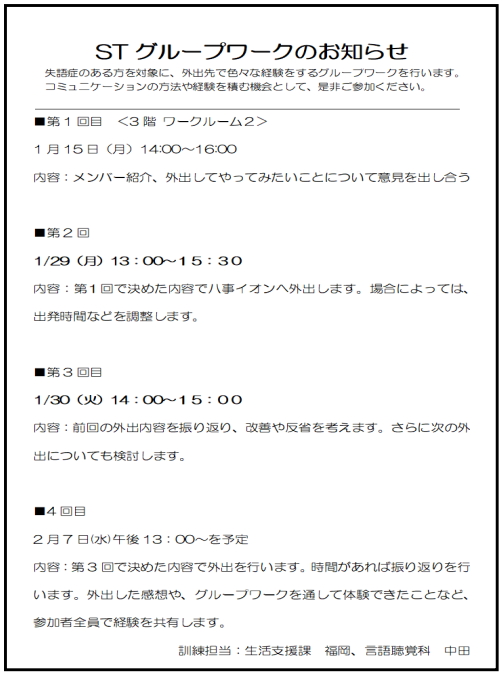
日時　令和５年４月１１日（火）～５月９日（火）の計５回

毎（火）13時～14時　ワークルーム2にて

職員　一色OT、塚本OT、杉山支援員

お渡しした「BADSの質問票」を回答して持ってきてください。

グループワークファイルも持参ください



ST グループワークのお知らせ

失語症のある方を対象に、外出先で色々な経験をするグループワークを行います。
コミュニケーションの方法や経験を積む機会として、是非ご参加ください。

■第１回目　<３階 ワークルーム２>

１月１５日（月）14:00～16:00

内容：メンバー紹介、外出してやってみたいことについて意見を出し合う

■第２回

1/29（月）13：00～１５：３０

内容：第１回で決めた内容でハ事イオンへ外出します。場合によっては、出発時間などを調整します。

■第３回目

1/30（火）14：00～１５：００

内容：前回の外出内容を振り返り、改善や反省を考えます。さらに次の外出についても検討します。

■４回目

２月７日(水)午後１３：００～を予定

内容：第３回で決めた内容で外出を行います。時間があれば振り返りを行います。外出した感想や、グループワークを通して体験できたことなど、参加者全員で経験を共有します。

訓練担当：生活支援課　福岡、言語聴覚科　中田

2．モデル事業者における自立訓練提供事例

奈良県障害者総合支援センター　自立訓練センター

スポーツ・レクリエーションによる障害受容の獲得

- 引き続き、障害受容の獲得に力を入れ、特にスポーツ・レクリエーション(スポレク)を通じて障害への理解について積極的にアプローチを行っている。 障害を負った現実を受け入れにくい利用者も多く、障害受容に時間がかかるが、スポーツを通じて障害を理解すること・伝えることに注力して、“他者の障害を理解する”から、“自己の障害の理解”へと繋げる。

- 引き続き、県内に高次脳機能障害に特化した施設がほとんど存在しないため、受皿拡充と訓練の効果検証を公表すべく、障害への理解促進を図るためのリーフレットを作成。

①表面
　自動車事故により高次脳機能障害を負われた方が自立訓練を利用することとなったケースを具体的に記載することで自立訓練の目的が伝わるよう配慮。
②裏面
　基本的な訓練に加えて、当施設独自の新規事業としてスポーツレクリエーションを導入し、スポーツを通じたコミュニケーションに重点を置いた訓練メニューを訴求。

生活訓練の内容紹介

機能訓練の内容紹介

生活訓練利用ケース紹介

利用ケース紹介

地域生活を基盤としながら、一般就労へ

30代　男性
交通事故外傷性頸椎損傷
左上肢機能障害3級
両下肢機能障害2級

医学的リハビリテーションを経て、地域を基盤にしながら、就職活動を行う。一人での就職活動に限界を感じ、身体機能維持の目的で訓練を受けるために、通所にて当施設を利用開始。
移動能力と上肢機能の向上のためのプログラムに参加。基礎的なプログラム訓練を通じて、就労に必要な体力面・パソコン技能面での課題に直面。さらなるステップアップを図るために、応用訓練を追加。
これまでに就労経験のない業種の会社への就職活動も積極的に実施しているときに、縁があり、身体障害に理解のある地域の一般企業への就職を果たす。

ADLの向上・移動能力の向上により、自宅復帰へ

40代　男性／外傷性くも膜下出血
両上肢機能障害6級
体幹機能障害2級

交通事故後、医学的リハを終了したものの、身体機能障害により自宅での生活が困難となる。
そこで、家族との地域生活に向けて、施設に入所しながら、入浴動作訓練・歩行訓練などに取り組む。その結果、施設内は杖歩行、入浴は一部介助ではあるがその他は自立となる。ただ、慎重な性格もあり、自宅での生活の不安を感じており、外泊には消極的。実践移動訓練や社会適応訓練なども並行して実施したところ、これまでの訓練成果を確認でき、不安感が減少。
1年半の利用を経て、在宅生活に移行。

国土交通省自動車事故被害者支援体制等整備事業
（社会復帰促進事業）

機能訓練利用ケース紹介

利用ケース紹介

復職がうまくいかず、当施設利用後に一般企業への就労

20代　男性
交通事故による脳挫傷
高次脳機能障害

交通事故後に、注意力と記憶力の低下がみられたものの、病院のリハビリ終了後に復職。
復職後に仕事上でのミスを指摘されることが増え、奈良県高次脳機能障害支援センターに相談。
ご本人が訓練の必要性を感じ、当施設にて、グループ脳トレを受けられた。訓練を通じて、ご自身の認知機能の特性に気づき、また同じような境遇の仲間との出会いにより、徐々に仕事への自信を高める。
訓練と平行して、就職活動を行い、他府県の一般企業に就職が決まった。

一旦地域へ戻るも、就労への思いを叶えるために訓練に励み、福祉的就労を果たす

30代　男性
交通事故による外傷性くも膜下出血
高次脳機能障害

交通事故後に、高次脳機能障害と診断され、地域の生活介護施設を利用。
“就労”への希望が諦めきれず、奈良県高次脳機能障害支援センターに相談。
意欲低下と生活リズムの改善を図るために入所しながら、認知機能の改善だけでなく、就労に必要な基礎体力の改善にも取り組んだ。
就業・生活支援センターとも相談しながら、地域の就労継続支援（B型）へ移行し、さらなるステップアップを目指す。

国土交通省自動車事故被害者支援体制等整備事業
（社会復帰促進事業）

2．モデル事業者における自立訓練提供事例

かがわ総合リハビリテーションセンター成人支援施設

学習プログラム(グループワーク)の再構成

● 取組の背景

昨年度、モジュール項目ごとに日常生活の振り返りを行い、グループで学習する中で自らの状況を認識できるように配慮したところであるが、学習会(グループワーク)で得た知識やスキルを実生活に反映させる体系が不十分であった。

● 内容

① プログラム担当とケース担当がプログラム内の様子と日常生活の課題を共有する場を定期的に持つことで、利用者の状況を共有し、個別課題へのアプローチができるようになった。

② 他の自立訓練施設を視察し、プログラム内容、職員間の連携等について、プロジェクト内で共有し、導入できる内容について協議した。

● 取組の課題・改善点

- 訓練プログラムと実生活の連動性を高める必要がある。
- 自立訓練のうち、どのプログラムが有用であったのか効果測定ができていないため、SIMを導入し、評価を蓄積する必要がある。

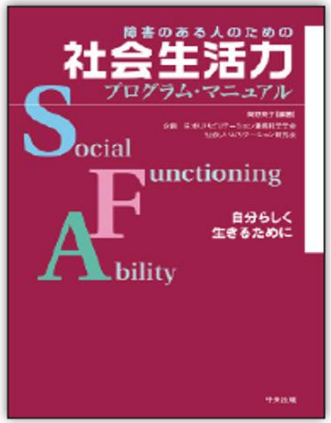
再構成した学習会のモジュール

学習会

目的：利用者の社会生活力の向上

テキストを元に学習を進めていく中で、障害認識、主体性、自己決定力を高めるとともに、活用できる知識や体験を増やし、自分らしい生活を考えていけるようにする。

高次脳機能障害にも対応した「社会生活力プログラム・マニュアル～自分らしく生きるために～」（2020年3月中央法規）を参考に、そのモジュールを再構成し、学習過程を学習会に活かす形でプログラムを作成した。



主要目次

Ⅰ 基本編
第1部 総論
第2部 障害ごとの留意点等
Ⅱ 実践編
効果的な実践方法と評価方法
第1部 生活の基礎をつくる
モジュール 1 健康管理
モジュール 2 食生活
モジュール 3 セルフケア
モジュール 4 生活リズム
モジュール 5 安全・危機管理
第2部 自分の生活をつくる
モジュール 6 金銭管理
モジュール 7 すまい
モジュール 8 掃除・整理
モジュール 9 買い物
モジュール 10 服装
第3部 自分と障害を理解する
モジュール 11 自分の理解
モジュール 12 障害の理解
モジュール 13 人間関係
モジュール 14 コミュニケーション
第4部 地域生活を充実する
モジュール 15 教育と学習
モジュール 16 就労生活
モジュール 17 恋愛・結婚・子育て
モジュール 18 外出・余暇活動
モジュール 19 地域生活・社会参加
第5部 自分の権利をいかす
モジュール 20 社会保障制度
モジュール 21 障害福祉制度・サービス
モジュール 22 介護保険制度・サービス
モジュール 23 支援の活用
モジュール 24 権利の行使と擁護

学習会

設定　・グループ固定　4月、6月、8月、10月、12月、2月開始の6G編成

1G（利用者9～10、職員2名+ケース担当）×6G

・時間枠　週に2枠（1枠1時間）設定、1枠に3G同時に行う　場所は3会場

・内容　1年で、全モジュールを実施、そのうち1モジュールのみじっくり行う

※以下の表について、以上の設定条件でできるよう、項目、内容、工夫点等検討してください。

	モジュール番号	モジュール項目	1回目	2回目	3回目	4回目
1	1,4	健康管理（服薬、生活リズム含む）※認知系は爪切り等整容を含む	振り返り	学習	シート作成	発表
2	2	食生活（調理は調理訓練で実施するため含まない）	振り返り	学習	シート作成	発表
3	5	安全・危機管理（自然災害のみ）	意見交換	学習	依頼書作成	発表
4	6	金銭管理（社会保障制度含む）	意見交換	学習	外部講師	振り返り
5	9	買い物	意見交換	計画	買い物	振り返り
6	11,12	自分の理解、障害の理解	振り返り	学習	将来像作成	発表
7	16	就労生活（導入）	意見交換	学習・計画	見学	振り返り
8	18	外出・余暇活動	意見交換	計画	外出	振り返り
9	19	地域生活・社会参加(オリジナル)	意見交換	学習	外部講師	振り返り
10	21,22,23	制度・サービス（障害・介護）※「支援の活用」含む	意見交換・学習	学習・計画	訪問・講師	振り返り

2．モデル事業者における自立訓練提供事例

広島県立総合リハビリテーションセンター　あけぼの

グループワークの実施について

● 取組の背景・概要

①生活訓練グループ、②機能訓練のニーズの高いグループ、③就労グループに分け、それぞれのグループに担当支援員を配置してグループワークを実施。作業療法士は各グループに横断的に関わりながら、訓練内容に対する専門的介入や、利用者に対する面談や評価などの個別対応を実施。

● 実施内容

① 生活訓練グループ

地域生活に必要なスキル獲得のため，メモリーノートを活用した日常生活訓練，コミュニケーション訓練，パソコン講習，利用者が自ら企画する形での外出訓練・買物訓練・調理実習，障害の学習会などを実施。

②機能訓練グループ

身体機能の維持向上のためのトレーニング実施を中心として，生活訓練グループ同様の内容を実施。

③就労グループ

復職希望者には、職場との調整や職場の希望する業務内容（清掃・皿洗い・受付業務など）に即した実践的な訓練を実施するとともに，復職後の定着に向けたフォローを利用者・職場に対して実施した。

新規就労希望者には、事務，軽作業，清掃，洗車，物品の運搬や管理など多様な業務訓練を実施するとともに，履歴書作成や面接練習，マナー練習などを実施。利用者の希望や障害特性に基づき，ハローワークや障害者就業・生活支援センター等の関係機関と連携し，募集事業所の見学～実習～トライアル雇用と関わりながら，障害特性による配慮事項や対応事項について事業所や連携機関との調整を行った。

● 取組の課題・改善点

職員には研修等の学習機会を用意しているが，就労支援など高度な支援スキルを要することも多く，力のある作業療法士や上司の援助が必要な状況であり，職員のスキルアップやサービスの均一化が課題。

また、近年の賃金上昇により，福祉職への就職希望者そのものが大きく減少しており，常に人材確保及び育成が課題。

機能訓練

就労訓練

2．モデル事業者における自立訓練提供事例

ダイアリー

人員体制、就労に向けた取り組みについて

● 取組の背景・概要

高次脳機能障害の受け入れ先が少ない状況の中で、当施設の機能訓練の定員が少ないことで病院退院後の入所待ちが生じていたため、言語聴覚士を増員し、定員14名から20名に引き上げて高次脳機能障害の方々への訓練の機会を増やした。さらに、今後、理学療法士や作業療法士を増員予定。また、失語症を含む高次脳機能障害は自分がどのようなことができるかをイメージしにくく、受入側の就労系事業所も障害特性を理解しにくいことから、対象者とともに就労系事業所を見学した。

● 取組の効果

定員を拡大したことで待機者が減少し、言語聴覚士を増員したことで、高次脳機能障害（失語症を含む）の方々の個別訓練の時間の増加と質の向上につながった。また、高次脳機能障害者4名が就労系事業所を見学することで通所をイメージすることができ、訓練期間終了までに当該事業所へ移行予定。1名が一般企業を見学した。企業側が高次脳機能障害を理解し、体験実習に進むことになった。

● 取組の課題・改善点

OT・PT・STによる個別の課題に対する具体的なアプローチ方法、社会参加に向け施設外の他事業所や企業へ対象者と一緒に見学・訪問する時間を増やす必要がある。また、就労系の事業所でつまづいているケースを機能訓練に繋げること、逆に機能訓練中から就労系の事業所に繋げ、就労支援と機能訓練を併用しながら対象者の状態にあった支援プログラムを作る仕組みが必要である。

訓練プログラム

	1	2	3
A群（高次脳機能障害＋身体機能障害）	身体プログラム（基本・応用・社会適応）	高次脳機能プログラム（小集団）	高次脳機能プログラム（個別）
B群（高次脳機能障害）	高次脳機能プログラム（個別）	高次脳機能プログラム（小集団）	高次脳機能プログラム（集団）
C群（身体機能障害）	身体プログラム（基本）	身体プログラム（応用）	身体プログラム（社会適応）

３．モデル事業者における地域連携事例の概要

（令和４年度より実施）

千葉県千葉リハビリテーションセンター　障碍者支援施設　更生園

- 昨年度、地域支援施設における高次脳機能障害の理解を促す啓発活動が課題となったことを受け、過去に訪問した地域事業所に加え、新たに中核地域生活支援センターや基幹相談支援事業所等を訪問し、連携体制を構築した。
- 高次脳機能障害の理解を深めて頂くために障害特性や支援の可視化が必要と考え、啓発活動用リーフレット（３種類）と説明用動画を作成し配布、公開した。

名古屋市総合リハビリテーションセンター

- これまで高次脳機能障害の拠点機関として地域連携を支援してきたところ、他の支援機関の協力を得てさらに強化し、目的・対象者別にケース会議、主催研修・見学会等を重層的に開催するとともに、他の支援機関の企画に講師派遣・運営協力するなど、相互に事業協力を図った。
- 新たに市民向けのチラシを作成・配布し、従前実施してこなかった名古屋市内公所等での配架を行った。

奈良県障害者総合支援センター　自立訓練センター

- 引き続き、支援市町村や相談支援事業所における高次脳機能障害への理解が必要であることから、県内全市町村を訪問し、リーフレット、ポスター、事業紹介カードを配布。
- 地域連携用のリーフレットについては、当事業所の実施する電話相談・事業所訪問といった地域生活支援事業と、他の事業所や企業に向けた研修会開催などのバックアップ体制とともに実際の活用事例を掲載。

かがわ総合リハビリテーションセンター成人支援施設

- 令和５年度は相談支援事業所を中心に地域の支援状況の確認を行い、高次脳機能障害支援センターや成人支援施設（自立訓練）の役割や対象者像の共有、連携することの有効性等について説明を実施。
- 自立訓練利用終了後の状況確認を実施し、新たな問題が発生している場合は本人への支援と支援者への後方支援を実施。

３．モデル事業者における地域連携事例の概要

（令和５年度より実施）

広島県立総合リハビリテーションセンター　あけぼの

- 自立訓練事業所を退所後、高次脳機能障害者が自宅復帰できない場合の居所や居所から通える高次脳機能障害に理解のある事業所が少ないため、高次脳機能障害者を受け入れている事業所及びこれから受け入れる事業所に対して支援を行う必要があると考え、基幹相談支援センターを訪問し、高次脳機能障害者への相談支援や高次脳機能障害者を受け入れている事業所に当施設のサービスの情報提供を依頼。
- また、就労支援機関や企業に対して積極的な働きかけを行うことで高次脳機能障害者の就職実績に繋がった。

ダイアリー

- 高次脳機能障害者の復職予定企業に対し、仕事内容を聴取した上で、ST、OTができる仕事・難しい仕事を選別し、難しい仕事はどのようにすれば可能かを企業側に説明し、復職をサポートした。
- また、高次脳機能障害が入居しているグループホーム3ヵ所で現状と困りごとの聞き取りを実施し、生活支援員を対象に研修会を開催し理解を促した。

3．モデル事業者における地域連携事例

千葉県千葉リハビリテーションセンター　障碍者支援施設　更生園

リーフレットと動画による高次脳機能障害への理解促進

●取組内容

　昨年度の活動実績から地域支援施設において高次脳機能障害への認識が低いことが分かり、高次脳機能障害を理解を促す啓発活動が課題となったことを受け、以下を実施した。

・過去に連携した地域事業所に加え、中核地域生活支援センターや基幹相談支援事業所等を訪問し、連携体制を構築

・自立訓練事業所を退所した方（自動車事故による高次脳機能障害者）への訪問支援

　また、高次脳機能障害の理解を深めて頂くために障害特性や支援の可視化が必要と考え、啓発活動用リーフレットと説明用動画を作成し配布、公開した。

（リーフレット）

①医療機関・地域支援機関用：自立訓練との連携説明

②自立訓練事業PR用　　：機能訓練、生活訓練の高次脳機能障害者支援プログラムの説明

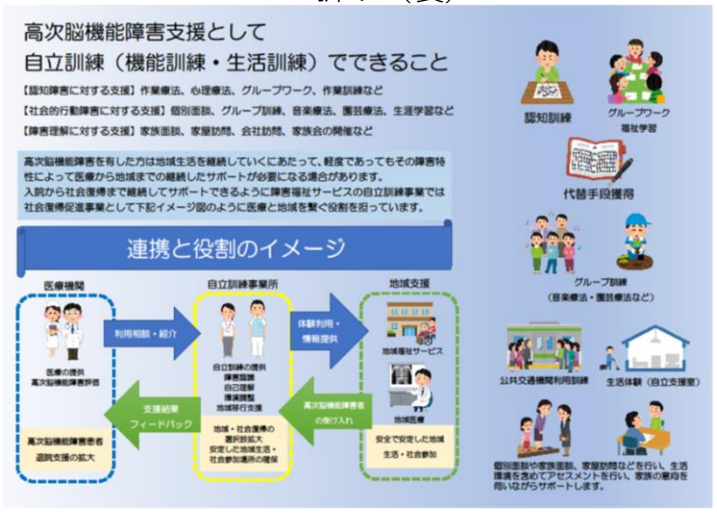
③当事者・家族用　　：高次脳機能障害の説明及び高次脳リハモデルの紹介

●取組の成果と課題

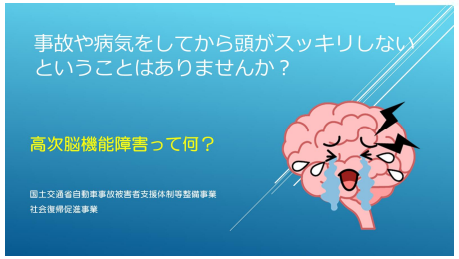
　地域支援事業所だけでなく当事者や当事者を支える支援者が高次脳機能障害及び当該障害の支援内容を理解して頂くためには現在配布しているリーフレット以外にもフリー媒体（SNSや動画投稿サイト）等を活用して理解を広めていく必要がある。

医療機関・地域支援機関用リーフレット
三つ折り（表）

医療機関・地域支援機関用リーフレット
三つ折り（裏）



高次脳機能障害の紹介動画
（6分程度）
YouTubeで公開中
「高次脳機能障害って何？」



3．モデル事業者における地域連携事例

名古屋市総合リハビリテーションセンター

会議・研修・見学会等の開催による連携強化

●取組の背景

高次脳機能障害に対する支援は、医療から始まり、行政、福祉、教育、就労支援機関等の幅広い関係者が関わっていることから、それぞれのニーズに即した研修を通じて連携を深め、人材を育成する必要がある。

●取組内容

市民向けチラシ等を作成および配布したことで、相談が徐々に増加。

従来からの「ケース会議」「研修」「見学会」「広報・情報支援」を継続・強化しつつ、これまで取り組みが十分出来ていなかった対象者（失語症のある方の支援、若年層への支援、家族等）へのグループ支援や、事業所・サロン等地域への訪問を重点化した。

＜実施内容＞
- ・福祉事業所への出張相談
- ・失語症サロンでの出張相談
- ・若年者のつどい
- ・失語症のある方のICT講座
- ・メール相談開設
- ・情報の充実化
- ・広報・啓発

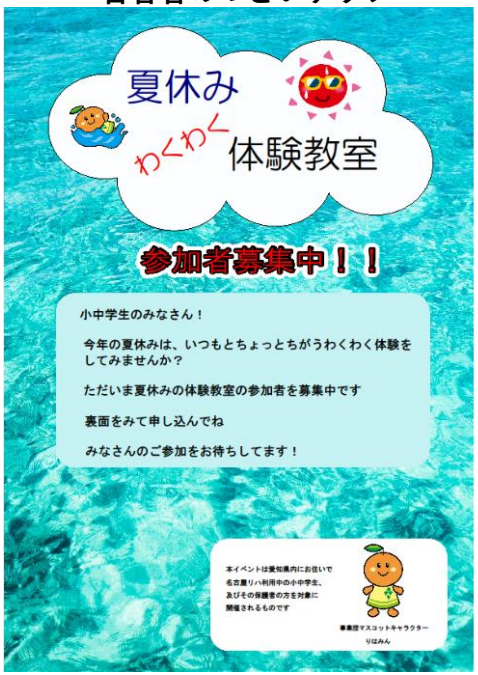
●取組の課題（改善点）

これまでの取り組みを継続・強化しつつ、今後はこれまで研修を開催できていない県内エリアや支援機関に対してニーズを確認しつつ、企画していく。

市民向けチラシ

メール相談開設チラシ

若者者のつどいチラシ



失語症のある方のICT講座チラシ

3．モデル事業者における地域連携事例

奈良県障害者総合支援センター　自立訓練センター

市町村等訪問を通じた理解促進

●取組内容

引き続き、県内の自立訓練事業所に加え、地域での生活支援の中心となっている全ての市町村役場、地域包括支援センター等を訪問し、リーフレットや事業紹介カードを活用して高次脳機能障害への地域生活支援の必要性を説明し、地域における高次脳機能障害の認知度向上を目指した。

●取組の成果と課題

定期的な訪問により、市町村から自立訓練事業所の利用希望の相談が多いとの声をいただいている。支援者の育成や市町村役場及び各関係機関との包括的な支援の取り組みが重要であり、研修会の継続や定期的な訪問により自立訓練事業所との相互の有機的な連携を図るために引き続き、取り組みを継続する必要がある。

表面　地域でのサポート事例を紹介

地域生活支援事業 活用例

地域の企業で、はじめて障害者枠で採用されたAさん
30代　男性 交通事故による脳挫傷 高次脳機能障害

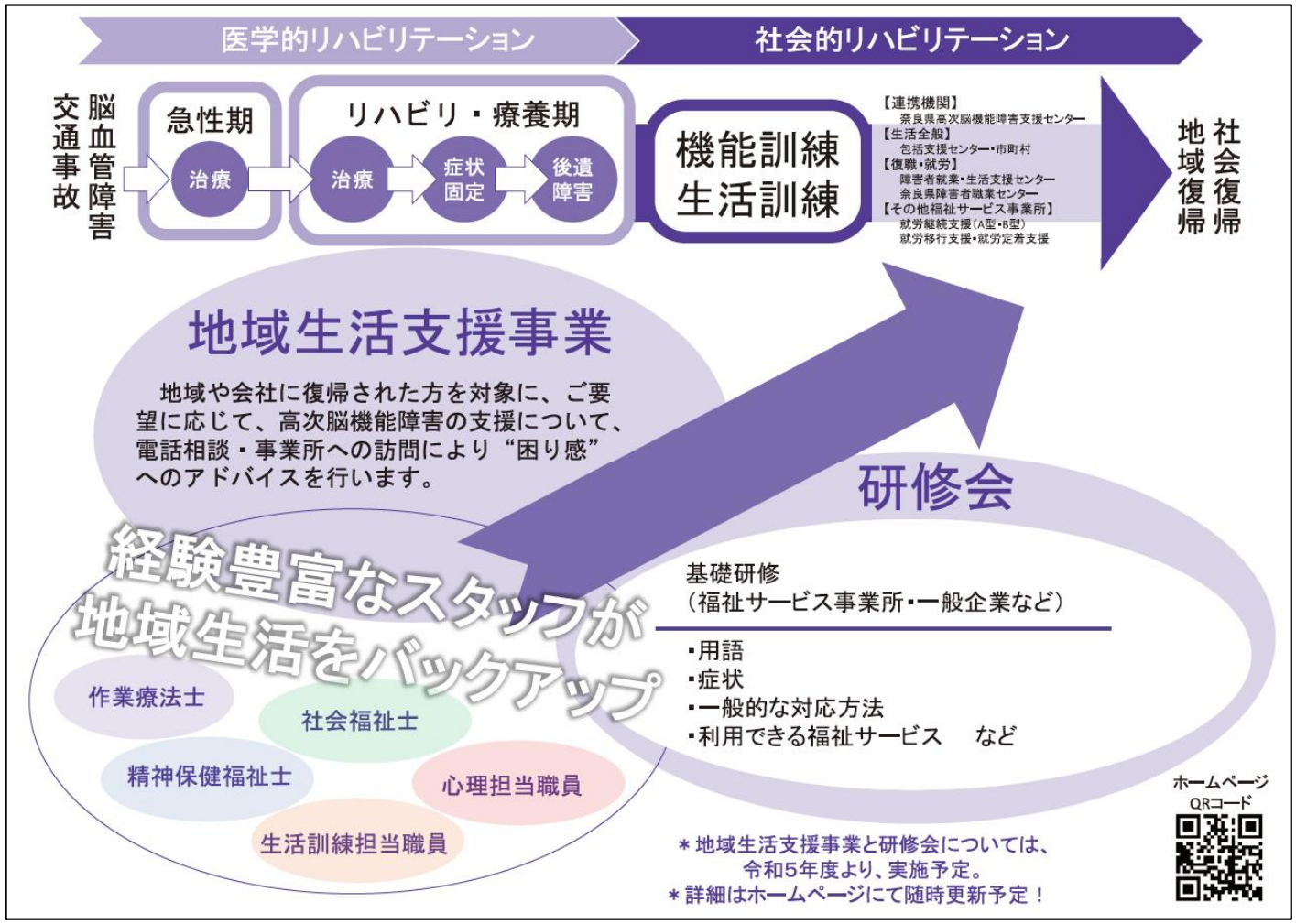
交通事故後、注意力と記憶力の低下が見られた。病院でのリハ終了後に復職するも、以前のようには仕事ができず、違和感を感じたご家族が奈良県高次脳機能障害支援センターに相談し、生活訓練を受けることになった。

グループ脳トレや就労前訓練を受ける中で、高次脳機能障害の知識を得るも、“もともと苦手だから”とご自身の認知機能の特性の変化を受け入れにくかった。しかし、職員や利用者同士の交流が深まる中で、今現在の自分の能力を感じ、今の自分に必要なスキルを身につけることの大切さに気がつく。その後、障害者就業・生活支援センターとも連携し、退所後は、地域の企業に障害者枠で就職を果たすことになった。

しかし、その企業で高次脳機能障害の方を受け入れることが初めてであったため、ご本人にどのような業務や職場環境を提供すれば良いかわからないという相談が当施設にあった。生活訓練担当・社会福祉士・心理担当職員が、本人の認知機能の特性の説明、本人が取り組みやすい職場環境・作業工程や指示の出し方の工夫などのアドバイスを行い、障害者就業・生活支援センターとも連携を密にしながら、ご本人の長期的な就労をサポートした。

国土交通省自動車事故被害者支援体制等整備事業
（社会復帰促進事業）

裏面　地域でのバックアップ体制を紹介



3．モデル事業者における地域連携事例

かがわ総合リハビリテーションセンター成人支援施設

相談支援事業所への説明

●取組の背景

病院退院後に適切な支援へ繋がっていない場合や自立訓練利用終了後に新たな問題が発生している場合があるが、支援が途切れてしまった方への関わりについて、支援体制に地域差がある。

●取組内容

令和5年度は相談支援事業所を中心に地域の支援状況の確認を行い、高次脳機能障害支援センターや成人支援施設（自立訓練）の役割や対象者像の共有、連携することの有効性等について説明を実施した。また、講師を派遣し、高次脳機能障害児者への支援について説明することで、個別相談へ繋がった。

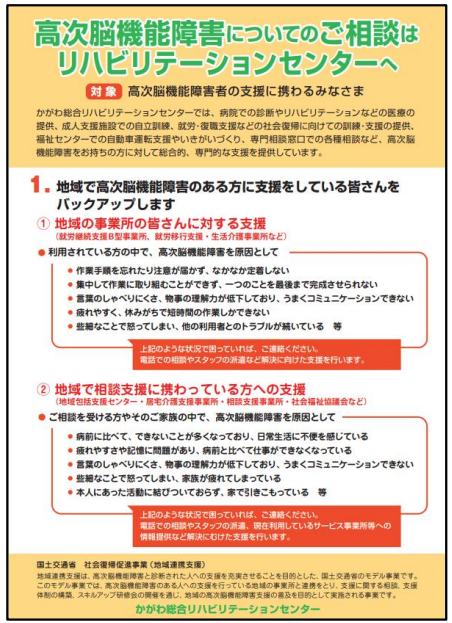
自立訓練利用終了者の状況確認を実施し、新たな問題が起きている場合は当事者への支援と支援者への後方支援を行った。

●取組の成果と課題

相談支援事業所への訪問を継続するとともに、地域の通所系サービス提供事業所に対しても、支援状況の確認、高次脳機能障害支援センターや成人支援施設（自立訓練）の役割や対象者像の共有、連携することの有効性等について説明を行い、高次脳機能障害者の理解を深める必要がある。

また、地域での高次脳機能障害者への支援がより充実するよう、運動や余暇活動、コミュニケーション支援、福祉用具の活用、ICTの活用などにテーマを広げ、ニーズに合った研修を実施する必要がある。

A4チラシ表面



高次脳機能障害についてのご相談はリハビリテーションセンターへ

対象 高次脳機能障害者の支援に携わるみなさま

かがわ総合リハビリテーションセンターでは、病院での診断やリハビリテーションなどの医療の提供、成人支援施設での自立訓練、就労・復職支援などの社会復帰に向けての訓練・支援の提供、福祉センターでの自動車運転支援やいきがいづくり、専門相談窓口での各種相談など、高次脳機能障害をお持ちの方に対して総合的、専門的な支援を提供しています。

1. 地域で高次脳機能障害のある方に支援をしている皆さんをバックアップします

① 地域の事業所の皆さんに対する支援
（就労継続支援B型事業所、就労移行支援・生活介護事業所など）

● 利用されている方の中で、高次脳機能障害を原因として
- 作業手順を忘れたり注意が散がず、なかなか定着しない
- 集中して作業に取り組むことができず、一つのことを最後まで完成させられない
- 言葉のしゃべりにくさ、物事の理解力が低下しており、うまくコミュニケーションできない
- 疲れやすく、休みがちで短時間の作業しかできない
- 些細なことで怒ってしまい、他の利用者とのトラブルが続いている　等

上記のような状況で困っていれば、ご連絡ください。
電話での相談やスタッフの派遣など解決に向けた支援を行います。

② 地域で相談支援に携わっている方への支援
（地域包括支援センター・居宅介護支援事業所・相談支援事業所・社会福祉協議会など）

● ご相談を受ける方やそのご家族の中で、高次脳機能障害を原因として
- 病前に比べて、できないことが多くなっており、日常生活に不便を感じている
- 疲れやすさや記憶に問題があり、病前と比べて仕事ができなくなっている
- 言葉のしゃべりにくさ、物事の理解力が低下しており、うまくコミュニケーションできない
- 些細なことで怒ってしまい、家族が疲れてしまっている
- 本人にあった活動に結びついておらず、家で引きこもっている　等

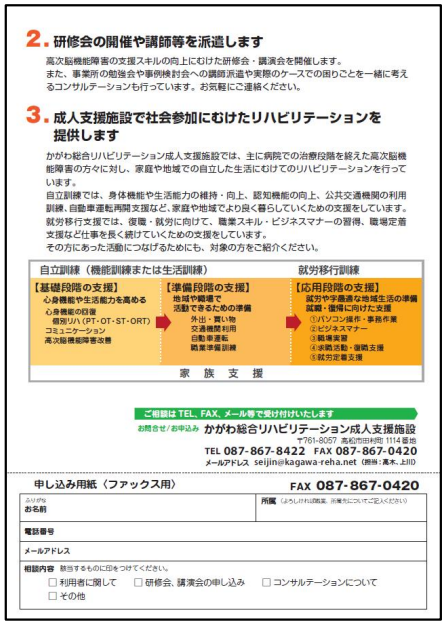
上記のような状況で困っていれば、ご連絡ください。
電話での相談やスタッフの派遣、現在利用しているサービス事業所等への情報提供など解決にむけた支援を行います。

国土交通省　社会復帰促進事業（地域連携支援）

地域連携支援は、高次脳機能障害と診断された人への支援を充実させることを目的とした、国土交通省のモデル事業です。このモデル事業では、高次脳機能障害のある人への支援を行っている地域の事業所と連携をとり、支援に関する相談、支援体制の構築、スキルアップ研修会の開催を通じ、地域の高次脳機能障害支援の質を目的として実施される事業です。

かがわ総合リハビリテーションセンター

A4チラシ裏面



2. 研修会の開催や講師等を派遣します

高次脳機能障害の支援スキルの向上にむけた研修会・講演会を開催します。
また、事業所の勉強会や事例検討会への講師派遣や実際のケースでの困りごとを一緒に考えるコンサルテーションも行っています。お気軽にご連絡ください。

3. 成人支援施設で社会参加にむけたリハビリテーションを提供します

かがわ総合リハビリテーション成人支援施設では、主に病院での治療段階を終えた高次脳機能障害の方々に対し、家庭や地域での自立した生活にむけてのリハビリテーションを行っています。
自立訓練では、身体機能や生活能力の維持・向上、認知機能の向上、公共交通機関の利用訓練、自動車運転再開支援など、家庭や地域でより良く暮らしていくための支援をしています。
就労移行支援では、復職・就労に向けて、職業スキル・ビジネスマナーの習得、職場定着支援など仕事を長く続けていくための支援をしています。
その方にあった活動につなげるためにも、対象の方をご紹介ください。

自立訓練（機能訓練または生活訓練）		就労移行訓練
【基礎段階の支援】 心身機能や生活能力を高める 心身機能の回復 個別リハ（PT・OT・ST・ORT） コミュニケーション 高次脳機能障害改善	【準備段階の支援】 地域や職場で 活動できるための準備 外出・買い物 交通機関利用 自動車運転 職業準備訓練	【応用段階の支援】 就労や学業適な地域生活の準備 就職・復職に向けた支援 ①パソコン操作・事務作業 ②ビジネスマナー ③職場実習 ④求職活動・復職支援 ⑤就労定着支援
家　族　支　援		

ご相談はTEL、FAX、メール等で受け付けいたします

お問合せ/お申込み　かがわ総合リハビリテーション成人支援施設
〒761-8057 高松市田村町 1114番地
TEL 087-867-8422　FAX 087-867-0420
メールアドレス seijin@kagawa-reha.net（担当：高木、上川）

申し込み用紙〈ファックス用〉　FAX 087-867-0420

ふりがな お名前	所属（よろしければ職業、治療などについてご記入ください）
電話番号	
メールアドレス	

相談内容　該当するものに印をつけてください。
□ 利用者に関して　□ 研修会、講演会の申し込み　□ コンサルテーションについて
□ その他

３．モデル事業者における地域連携事例

広島県立総合リハビリテーションセンター　あけぼの

基幹相談支援センターへの訪問

●取組の背景・概要

自立訓練事業所を退所後，高次脳機能障害者が自宅復帰できない場合の居所（グループホーム等）が不十分であるとともに、居所から通える高次脳機能障害に理解のある事業所（作業所や企業等）が少ない実情があることから、高次脳機能障害者を受け入れている事業所及び今後受け入れる事業所に対して、支援における困りごと相談、あけぼのでの生活訓練の支援状況の見学研修、勉強会への参加、事業所への作業療法士及び支援員の派遣などにより、地域の事業所支援を行う必要があった。

●取組内容

基幹相談支援センターを訪問し、高次脳機能障害者への相談支援や高次脳機能障害者を受け入れている作業所に情報提供を依頼。また、就労支援機関や企業に対して積極的な働きかけを行うことで高次脳機能障害者の就職実績に繋がった。

●取組の成果と課題

高次脳機能障害者を受け入れている事業所や受け入れ可能な事業所の把握が課題である。

３．モデル事業者における地域連携事例

広島県立総合リハビリテーションセンター　あけぼの

高次脳機能センターパンフレット

高次脳機能障害とは？

事故（交通事故や転落等）や病気（脳卒中や脳炎等）などで，脳が損傷することによって以下のような症状があらわれることがあります。これらの障害をまとめて『高次脳機能障害』といい，日常生活や仕事，対人関係に問題が出る場合があります。

この障害は外見上ではわかりにくく，周囲の理解を得られにくいという特性があります。また，障害の内容によっては，本人でも気づきにくいということがあります。

高次脳機能障害の主な原因

1．脳外傷：交通事故や転落など
2．脳卒中：脳出血，脳梗塞，くも膜下出血など
3．その他：脳炎，脳腫瘍，低酸素脳症，蘇生後脳症など

高次脳機能障害の主な症状

■記憶障害
・約束を忘れてしまう。
・今言ったことを忘れてしまう。

■注意障害
・ボーっとしている。
・一度に２つの事が出来ない。

■遂行機能障害
・時間を守れなくなった。
・計画を立てることが困難。
・仕事をやりかけてそのまま放っておいてしまうことが多くなった。

■社会的行動障害
・感情の爆発がある。
・浪費がひどくなった。
・みんなのいる前で不適切な発言をするようになった。
・依存的になった。

■失語症
・思ったことが言葉にならない。
・言葉や数字の理解が難しい。
・言われたことが理解できない。
・読めない。
・書けない。

高次脳機能センターは高次脳機能障害者とご家族が幸せに暮らせる社会を目指します

高次脳機能センターの機能
□相談，家族支援
□入院・外来での専門医療
・診断・評価
・リハビリテーション医療
□生活自立・社会復帰支援（就学支援・就労支援）
□地域ネットワーク
□教育・啓発・調査研究
□その他，新たなニーズへの対応

診療のご案内

診療は予約制です。まずは，お電話にてご相談下さい。

TEL082-425-1455（内線 237）

＊脳疾患・リハビリテーションに関する専門医が診察します
＊県内随一の高次脳機能障害診療実績を有します
＊専門の支援コーディネーターが対応します
＊相談のみでもお受けいたします

相談：無料

アクセス

■「JRパス」を利用の場合
「県立西条農業高等学校前」停留所で下車。停留所より約１km

■自動車の場合
山陽自動車道西条インターから車で約20分

■無料送迎バス
JR西条駅前（６番バス停）から，「広島県立障害者リハビリテーションセンター行き」の無料送迎バス（１日７往復）があります。
＊詳しくはHPでご確認ください。

医療センター

広島県高次脳機能センター

Hiroshima Higher Brain Function Center

広島県立障害者リハビリテーションセンター

〒739-0036　東広島市西条町田口 295-3

TEL　082-425-1455（内線 237）

FAX　082-425-1094

URL　http://www.rehab-hiroshima.org

あけぼのパンフレット

あけぼのは…

高次脳機能障害・身体障害（肢体不自由）の方に対して，生活や就労の訓練および進路支援などのサービスを提供し，目標とする生活の実現をお手伝いします。

こんなお悩みやご希望はありませんか？

生活や人とのかかわりの中で「難しい」と感じることが多くなった。

車いすの練習，外出ができるようになりたい。

ひとり暮らしのための練習がしたい。

地域で利用できるサービスを知りたい。

高次脳機能障害のリハビリを続けたい。

出来ていると思っているのに，家族や周りの人から指摘されることが多くなった。

復職，就職がしたい。

高次脳機能障害による生活のしづらさは，専門的な支援を受けながら，時間をかけてじっくりと取り組むことが必要です。
私たちが応援します！まずは，ご相談ください。

～主な活動とサービスの内容～
・日常生活訓練　・代償手段の活用練習　・コミュニケーション（対人技能）練習
・外出訓練　・買物訓練　・宿泊訓練　・機能訓練　・スポーツ活動　・パソコン練習
・職業準備訓練　・職業体験訓練　・就労マッチング支援
・生活介助（入浴，排泄，食事等）　・レクリエーション活動　・余暇活動支援
・相談支援　・進路支援 ほか
＊「個別支援計画」を作成し，定期的に見直しを行いながら実施します。

障害者支援施設　あけぼの

生活訓練（自立訓練）
■対象：高次脳機能障害・身体障害（肢体不自由）の方
■利用期間：最長２年　■定員：24名
■主な内容：
・高次脳機能障害のリハビリ
・地域生活に必要なスキル獲得のための訓練
・身体機能の維持向上のためのトレーニング
・就労（復職を含む）を目標とする訓練や就職支援
・生活の場の検討や環境調整
・サービス利用の調整

生活介護
■対象：高次脳機能障害・身体障害（肢体不自由）の方
＊障害支援区分３以上（50歳以上は区分２以上）
■利用期間：個別に設定します。　■定員：30名
■主な内容：
・生活上必要な介助
・生活能力や心身機能の維持向上のための支援
・作業活動や趣味活動など個々の充実した活動

施設入所支援
■対象：区分４以上（50歳以上は区分３以上）の方
■利用期間：日中活動の利用期間に準ずる。
■定員：40名
■内容
・安全，安心な生活の場の提供
・日常生活上必要な介助や支援

短期入所
■定員：８名

3．モデル事業者における地域連携事例

ダイアリー

復職に向けた取り組み

●取組の背景・概要
　失語症を伴った高次脳機能障害が復職予定であったが、企業側が障害を理解できず、どのようなポジションでどのような仕事が担えるかをイメージできずにいたため、企業側に仕事内容を聴取し、ST、OTにて、できる仕事・難しい仕事を選別。難しい仕事はどのようにすれば可能かを企業側へ説明。

●取組成果
　機能訓練から直接、高次脳機能障害を企業への復職に繋ぐことができた。

●取組の課題
　復職を希望者に対する企業側との交渉の方法を増やし、さまざまなアプローチ方法を開拓していく必要がある。

共同生活援助（グループホーム）との連携

●取組の背景・概要
　親の高齢化、介護負担を訴えるケースが多い中で、高次脳機能障害が親元を離れて過ごせるイメージを作り、利用者の方々に情報提供していくことが必要であるが、生活を支える支援員が高次脳機能障害の接し方で困っているケースも見受けられるため、高次脳機能障害が入居しているグループホームで現状と困りごとの聞き取りを実施。

●取組成果
　高次脳機能障害者が入居しているグループホームで聞き取り調査を行った結果、高次脳機能障害への理解が乏しい状況が判明した。

●取組の課題
　グループホームにおける生活支援員や世話人を対象とした高次脳機能障害についての勉強会を開催し、理解を促すとともに、具体的な接し方を学ぶ機会が必要である。

モデル事業者の取組における課題

（令和４年度より実施）

千葉県千葉リハビリテーションセンター　障碍者支援施設　更生園

- ネットワーク構築において、地域連携シートについて、適切な情報量、資料の作成負担、自立訓練の成果・効果、SIMの示し方のさらなる検討が課題。
- 自立訓練において、支援結果（帰結）とSIMデータの比較検証により可視化された各項目のデータについて、自立訓練にてどのようなプログラムを提供しているか紐づけを行い効果測定をする必要がある。また、データ数が少ないことから、引き続きデータの蓄積等が必要である。
- 地域連携において、当事者や当事者を支える支援者が高次脳機能障害及び当該障害の支援内容を理解するためにフリー媒体（SNSや動画投稿サイト）等を活用する必要がある。

名古屋市総合リハビリテーションセンター

- ネットワーク構築において、地域の社会資源の状況により地域差が生じており、退院後、継続的にサービス利用に向けて地域の支援機関の早い段階での介入が必要となるため、対象病院と地域の支援機関とのネットワーク構築が課題。
- 自立訓練において、自宅又は居住地域へ訪問するアウトリーチによるIADL訓練の実施について、利用者に対し十分な訓練回数を実施するために必要なリハ専門職当の人材確保が課題。
- 地域連携において、法人の所在地との物理的な距離のある保健医療圏域の支援機関との連携が課題。

奈良県障害者総合支援センター　自立訓練センター

- ネットワーク構築において、定期的な訪問を実施する人員も限られるため、予算内で取り組める普及・啓発の方法を検討する必要がある。
- 自立訓練において、どのようにSIM評価を取り組むか検討する必要がある。
- 地域連携において、支援者の育成や市町村役場及び各関係機関との包括的な支援の取り組みが重要であり、研修会の継続や定期的な訪問により自立訓練事業所との相互の有機的な連携を図るために引き続き、取り組みを継続する必要がある。

かがわ総合リハビリテーションセンター成人支援施設

- ネットワーク構築において、医療機関に情報提供した内容が院内で適切に共有されるよう、資料を配付先で共有しやすいよう工夫する必要がある。
- 自立訓練において、どのプログラムが有用であったのか効果測定ができていないため、SIMを導入し、評価を蓄積することでより一層効果的なプログラムの構築に向けて検討を行う必要がある。
- 地域連携において、地域での高次脳機能障害者への支援がより充実するよう、運動や余暇活動、コミュニケーション支援、福祉用具の活用、ICTの活用などにテーマを広げ、ニーズに合った研修を実施する必要がある。

モデル事業者の取組における課題

（令和５年度より実施）

広島県立総合リハビリテーションセンター　あけぼの

- ネットワーク構築において、病院で退院支援を行うMSWが、一患者に対して一人で担当することや異動があることにより、情報が共有されなかったり引き継がれなかったりすることがあるため、積極的に定期的なPR訪問等を継続していく必要がある。
- 自立訓練において、近年の賃金上昇により、福祉職への就職希望者そのものが大きく減少しており、常に人材確保及び育成に課題がある。
- 地域連携において、高次脳機能障害者を受け入れている事業所の把握が課題

ダイアリー

- ネットワーク構築において、さらに多くの病院の相談員、地域連携室に直接訪問し、機能訓練について説明する必要がある。
- 自立訓練において、OT・PT・STによる個別の課題に対する具体的なアプローチ方法、社会参加に向け施設外の他事業所や企業へ対象者と一緒に見学・訪問する時間を増やす必要がある。
- 地域連携において、復職を希望者に対する企業側との交渉の方法を増やし、さまざまなアプローチ方法を開拓していく必要がある。

4．モデル事業による定量的効果

千葉県千葉リハビリテーションセンター　障碍者支援施設　更生園

ネットワーク構築

自立訓練の利用の有無に関わらず、病院とのネットワーク構築により、高次脳機能障害者の支援につながった人数（うち自動車事故被害者数）

		令和4年度	令和5年度
自立訓練の利用者		59名（ 6名）	76名（ 4名）
自立訓練の相談者		62名（ -名）	65名（ 3名）
自立訓練以外	高次脳機能障害支援拠点	42名（ 5名）	68名（ 5名）
	就労支援	6名（ 0名）	8名（ 2名）
	短期入所	6名（ 1名）	5名（ 0名）

自立訓練

高次脳機能障害者の利用状況（うち自動車事故被害者数）

		令和4年度	令和5年度
自立訓練		70名（ 6名）	91名（ 5名）
自立訓練以外	就労支援	15名（ 2名）	19名（ 4名）
	短期入所	8名（ 2名）	10名（ 3名）

地域連携

他の事業所等との地域連携により、高次脳機能障害者の支援につながった人数（うち自動車事故被害者数）

	令和4年度	令和5年度
復学・復職・再就職者	3名（ 0名）	13名（ 1名）
就労継続支援A・B型・就労移行事業所の利用者	12名（ 2名）	16名（ 0名）
自立訓練の利用者	0名（ 0名）	0名（ 0名）
その他（生活介護・介護保険事業所・地活・GH）	9名（ 2名）	5名（ 1名）

4．モデル事業による定量的効果

名古屋市総合リハビリテーションセンター

ネットワーク構築

自立訓練の利用の有無に関わらず、病院とのネットワーク構築により、高次脳機能障害者の支援につながった人数（うち自動車事故被害者数）

		令和4年度	令和5年度
自立訓練の利用者		19名（2名）	27名（1名）
自立訓練の相談者		101名（12名）	97名（5名）
自立訓練以外	高次脳機能障害支援拠点	101名（21名）	116名（21名）
	就労支援	7名（1名）	8名（1名）

自立訓練

高次脳機能障害者の利用状況（うち自動車事故被害者数）

		令和4年度	令和5年度
自立訓練		73名（4名）	79名（6名）
自立訓練以外	就労支援	43名（4名）	49名（3名）

地域連携

他の事業所等との地域連携により、高次脳機能障害者の支援につながった人数（うち自動車事故被害者数）

	令和4年度	令和5年度
復職・再就職者	7名（0名）	0名（0名）
就労継続支援A・B型事業所の利用者	18名（1名）	20名（1名）
その他（就労移行・地域活動支援）※	22名（2名）	26名（3名）

4．モデル事業による定量的効果

奈良県障害者総合支援センター　自立訓練センター

ネットワーク構築

自立訓練の利用の有無に関わらず、病院とのネットワーク構築により、高次脳機能障害者の支援につながった人数（うち自動車事故被害者数）

		令和4年度	令和5年度
自立訓練の利用者		7名（0名）	5名（0名）
自立訓練の相談者（利用に至らなかった人数）		4名（1名）	1名（0名）
自立訓練以外	施設入所支援	5名（0名）	4名（0名）
	短期入所	0名（0名）	0名（0名）

自立訓練

高次脳機能障害者の利用状況（うち自動車事故被害者数）

		令和4年度	令和5年度
自立訓練		80名（10名）	76名（9名）
自立訓練以外	施設入所支援	34名（1名）	30名（2名）
	短期入所	3名（1名）	2名（0名）

地域連携

他の事業所等との地域連携により、高次脳機能障害者の支援につながった人数（うち自動車事故被害者数）

	令和4年度	令和5年度
復職・再就職者	4名（0名）	9名（1名）
就労継続支援A・B型事業所の利用者	11名（1名）	7名（1名）
自立訓練の利用者	0名（0名）	1名（0名）
その他（医療機関・復学・就労移行・家庭復帰）	19名（4名）	14名（6名）

4. モデル事業による定量的効果

かがわ総合リハビリテーションセンター成人支援施設

ネットワーク構築

自立訓練の利用の有無に関わらず、病院とのネットワーク構築により、高次脳機能障害者の支援につながった人数（うち自動車事故被害者数）

		令和4年度	令和5年度
自立訓練の利用者		0名（0名）	4名（0名）
自立訓練の相談者		0名（0名）	4名（2名）
自立訓練以外	高次脳機能障害支援拠点	0名（0名）	21名（3名）
	就労移行支援	0名（0名）	2名（0名）
	生活介護	0名（0名）	1名（1名）

自立訓練

高次脳機能障害者の利用状況（うち自動車事故被害者数）

		令和4年度	令和5年度
自立訓練		38名（2名）	54名（3名）
自立訓練以外	就労支援	7名（0名）	5名（1名）
	施設入所支援	30名（2名）	43名（2名）
	短期入所	0名（0名）	1名（0名）
	日中一時支援	1名（0名）	1名（0名）

地域連携

他の事業所等との地域連携により、高次脳機能障害者の支援につながった人数（うち自動車事故被害者数）

	令和4年度	令和5年度
復職・再就職者	0名（0名）	7名（0名）
就労継続支援A・B型事業所の利用者	0名（0名）	7名（3名）
自立訓練の利用者	0名（0名）	4名（1名）
その他（自立訓練相談）	0名（0名）	8名（1名）

4．モデル事業による定量的効果

広島県立総合リハビリテーションセンター　あけぼの

ネットワーク構築

自立訓練の利用の有無に関わらず、病院とのネットワーク構築により、高次脳機能障害者の支援につながった人数（うち自動車事故被害者数）

		令和4年度	令和5年度
自立訓練の利用相談件数		18名（1名）	19名（0名）
自立訓練の利用につながった数		8名（0名）	11名（0名）
自立訓練以外	高次脳機能障害支援拠点（広島県高次脳機能センター）	30名（3名）	26名（4名）
	生活介護	0名（0名）	1名（0名）
	就労移行支援	0名（0名）	（休止中）
	施設入所支援	4名（0名）	9名（0名）
	短期入所	0名（0名）	0名（0名）

自立訓練

高次脳機能障害者の利用状況（うち自動車事故被害者数）

		令和4年度	令和5年度
自立訓練		30名（4名）	27名（2名）
自立訓練以外	生活介護	23名（7名）	21名（5名）
	就労移行支援	2名（1名）	（休止中）

地域連携

他の事業所等との地域連携により、高次脳機能障害者の支援につながった人数（うち自動車事故被害者数）

	令和4年度	令和5年度
復職・再就職者	3名（2名）	3名（1名）
就労継続支援A・B型事業所の利用者	8名（1名）	7名（0名）
生活介護の利用者	6名（0名）	2名（0名）
介護保険サービス（デイサービスなど）の利用者	2名（0名）	6名（0名）
医療サービス（精神科デイケアなど）の利用者	2名（0名）	3名（0名）

4．モデル事業による定量的効果

ダイアリー

ネットワーク構築

自立訓練の利用の有無に関わらず、病院とのネットワーク構築により、高次脳機能障害者の支援につながった人数（うち自動車事故被害者数）

		令和4年度	令和5年度
自立訓練の利用者		60名（4名）	67名（2名）
自立訓練の相談者		41名（1名）	37名（0名）
自立訓練以外	生活介護	0名（0名）	0名（0名）
	通所介護・介護予防通所介護	5名（1名）	4名（0名）
	共生型生活介護	該当無し	該当無し

自立訓練

高次脳機能障害者の利用状況（うち自動車事故被害者数）

		令和4年度	令和5年度
自立訓練		37名（3名）	31名（1名）
自立訓練以外	生活介護	0名（0名）	0名（0名）
	通所介護・介護予防通所介護	1名（0名）	1名（0名）
	共生型生活介護	該当なし	該当無し

地域連携

他の事業所等との地域連携により、高次脳機能障害者の支援につながった人数（うち自動車事故被害者数）

	令和4年度	令和5年度
復職・再就職者	4名（1名）	5名（0名）
就労継続支援A・B型事業所の利用者	0名（0名）	1名（0名）
自立訓練の利用者	0名（0名）	0名（0名）
共生型生活介護	該当無し	該当無し

5．モデル事業による自動車事故被害者に対する支援事例

千葉県千葉リハビリテーションセンター　障碍者支援施設　更生園

事例		地域連携支援				
事故被害者の概要	性別	男性	家族構成	（同居）母親		
	年代	50代	障害者手帳	精神保健福祉手帳3級	障害支援区分	なし
	事故から現在までの経緯	令和4～5年度本事業の対象者 令和3年2月二輪車で走行中に交通事故で受傷　A病院へ救急搬送され脳挫傷、外傷性くも膜下出血、頭蓋骨骨折の診断。同年4月リハビリテーション病院に転院。同年6月高次脳機能障害に対するリハビリ目的で千葉リハセンターに転院。同年8月自宅退院。令和4年3月千葉リハセンター外来SWより利用相談の連絡。同年4月施設見学、利用面談を行い同年6月より生活訓練で利用開始となる。本人、家族は「就労できる力を身に着けたい」との利用意向があり、認知スキル、対人スキル、作業能力の向上を目的に令和5年9月新規就労し退園。				
支援の概要	連携先	就労先企業、相談支援事業所、就労定着支援事業所				
	支援のきっかけ	新規就労し計画相談が終了となった為、当事業所がフォローアップ支援として本人に対し毎月様子伺いの連絡をしていた。令和6年2月の千葉リハセンター定期受診に同席した際に本人からの相談がある。				
	支援内容	相談内容「職場の人から頼まれていないことや、優先順位の低い作業を先にやってしまい怒られる」「協調性が無いのかもしれない」「上司からこの仕事は向いていないかもしれないと言われた」との申し出があるも、家族は上司からそのような話は聞いておらず歪曲して捉えているかもしれないとの情報。 職場と本人とで認識の違いがある可能性があるため、第三者の確認が必要と判断し就労定着支援の利用を提案する。				
	結果	令和6年3月に職場訪問を行い上司と面談。仕事における課題が多く、今すぐ契約終了というわけではないが「自分に合った仕事についてよく考えた方が良い」と伝えているとの事。職場との話し合い及び課題解決に向けて就労定着支援の利用を提案し了承される。同年4月就労定着支援事業の利用を開始し定期的な職場訪問を行う事で、現在も就労を継続している。				
モデル事業により可能となった支援のポイント		モデル事業の地域連携支援として地域移行後のフォローアップに力を入れたことにより、自立訓練利用終了者の相談に対応できる体制を整備したことで、課題が見えにくい高次脳機能障害者の社会参加継続に繋がった。				

5．モデル事業による自動車事故被害者に対する支援事例

名古屋市総合リハビリテーションセンター

事例		自立訓練提供支援				
事故被害者の概要	性別	男性	家族構成	（別居）弟		
	年代	50代	障害者手帳	精神2級	障害支援区分	3
	事故から現在までの経緯	自動車での単独事故により受傷し、救急搬送された病院にて左前頭部の開頭手術を実施。入院中よりてんかん発作があり抗てんかん薬が処方される。事故の18年後にてんかんによりクリニックを受診。受診の翌年以降てんかん発作は起きていない。事故後約30年後に高次脳機能障害の精査を目的に名古屋リハ附属病院を受診。受診の約2年後より名古屋リハ障害者支援施設を利用。				
支援の概要	連携先	相談支援事業所、てんかん専門クリニック				
	支援のきっかけ	相談支援事業所からの相談				
	支援内容	①作業能力 記憶力の低下により新規課題の積み上がりに時間がかかり、多情報の処理は注意が払いきれずにミスが見られていた。やり方の説明も小出しにゆっくりと伝えないと理解できなかった。上手くできないことで訓練課題そのものへ不満が噴出する様子が見られていた。興味のある課題や評価結果をもとに有効な対処法を示しながら取り組むことで、行える課題に広がりが出た。 ②適応面、認識面 本人の認識と異なるできごとやイレギュラーな状況、うまくできないことが出てくると感情が抑えられず、職員に強く当たる様子がみられていた。その際、職員の助言を受けても感情を抑えられなかった。そのような行動に出ることが自分にとって不利益になることや定期的に訓練課題の意味の説明や評価を伝えることで、職員の助言に耳を傾けられるようになった。また、興味のある訓練課題やミスせず取り組める課題を中心的に行うよう設定することで、穏やかに取り組める頻度が増加した。 ③活動先の検討 自立訓練を通して作業内容への興味関心の確認、評価結果を参考に本人の障害特性にあった作業内容をすり合わせながら、本人の状況にあった活動方法を模索してきた。当初は現実的でない活動内容しか検討できなかったが、本人にあった作業内容や作業環境を伝えていくことで、徐々に現状に合わせた活動内容を検討するようになった。				
	結果	名古屋リハ自立訓練（機能訓練）利用を経て就労継続支援B型の利用に至る				
モデル事業により可能となった支援のポイント		本事例は事故より長年が経過しており、高次脳機能障害について知らない状況であり精査もされないまま生活を送ってきた。その結果、うまくいかない理由がわからぬまま離転職を繰り返してきていた。相談支援事業所からの相談により、自立訓練において神経心理学検査等の医学的評価をもとに様々な訓練場面を通して現状の精査を行うことで、本人の高次脳機能障害の特性や本人との関わり方を相談支援事業所へと情報共有を行うことができ、本人に合った活動先へとつなげることができたと考えている。				

5．モデル事業による自動車事故被害者に対する支援事例

奈良県障害者総合支援センター　自立訓練センター

事例		自立訓練提供支援				
事故被害者の概要	性別	女性	家族構成	（同居）父・母		
	年代	20代	障害者手帳	身体障害者手帳2種2級	障害支援区分	なし（通所利用）
	事故から現在までの経緯	平成29年3月自動車事故にて頭部外傷受傷。右大脳半球に広範囲な虚血性病変を伴い、左不全麻痺・右眼失明・右動眼神経麻痺・高次脳機能障害を後遺。同年6月A病院転院。同年7月B病院に身体症状と高次脳機能障害に対するリハビリテーション目的で転院（退院後も外来リハ継続）。令和3年、奈良障害者職業センターに職業相談し、職業評価を受検。職業評価の結果により、高次脳機能障害に関するトレーニングをすすめられ、奈良高次脳機能障害支援センターにて相談。奈良高次脳機能障害支援センターの紹介により利用に至る。				
支援の概要	連携先	奈良高次脳機能障害支援センター・奈良障害者職業センター・就労移行支援施設・計画相談				
	支援のきっかけ	奈良障害者職業センターの職業評価の結果により、高次脳機能障害に関するトレーニングをすすめられ、奈良高次脳機能障害支援センターの紹介により、利用開始				
	支援内容	①就労（最終目標）したい（就職に役立つスキルを身につけたい）。 ②体力・集中力・記憶力・判断力を向上させたい。 ③頭痛に上手く対処できるようになりたい。 ④他利用者と交流することで、情報交換がしたい。 ⑤希望訓練は、グループ脳トレ・パソコン・習字・OT・個別脳トレ・歩行・マット ⑥最初は、週3回の利用から開始して、週5回に増やしていきたい（最終目標の就労を目指して） 上記6点のニーズに対して、就労に必要な体力の維持向上を目的にマット・歩行訓練・スポレクを、また就労に必要な高次脳機能障害の改善と集中力・判断力の向上を目的に、OT・個別脳トレさらにグループ脳トレAからCを段階的に導入した。また、就労に必要なスキル獲得を目的に、習字・パソコン訓練にも提供した。また、訓練を通じて、高次脳機能障害への本人の認識も高まり、頭痛が軽減したことから、就労前訓練も追加提供した。				
	結果	本人・家族・高次脳機能障害支援センター・自立訓練センターとの支援会議を開催（進路の方向性の確認。セルフプランから計画相談の利用検討をすることで、長期的な家族の支援体制を構築）。奈良県障害者職業センターとの支援会議も経て、地域の就労移行支援施設を2カ所見学・体験し、就労移行支援施設の利用が決定された。				
モデル事業により可能となった支援のポイント		モデル事業の地域連携支援として、自立訓練提供事業所による地域生活への移行支援の重要性が明確化されたことにより、地域事業所で開催される支援会議への参加がよりスムーズになり、対面での情報交換が行われるようになったことで、利用者の個別性の高い高次脳機能障害の症状の理解に繋がった。				

5．モデル事業による自動車事故被害者に対する支援事例

奈良県障害者総合支援センター　自立訓練センター

事例		地域連携支援				
事故被害者の概要	性別	男性	家族構成	（同居）配偶者・子ども		
	年代	40代	障害者手帳	精神保健福祉手帳3級	障害支援区分	なし（通所利用）
	事故から現在までの経緯	令和元年5月に同乗していた自動車が後方より追突されたことで受傷。首の痛みが徐々に悪化。B病院に緊急搬送。CT検査では異常は見られず帰宅。翌週になっても痛み継続し、C病院を受診するも“異常なし”との診断。1ヶ月経っても痛みが続くためD病院を受診し、頸椎骨折が見つかる。リハビリ・治療目的でE病院に通院。記憶力や集中力の低下を自覚し、F病院を受診し、びまん性軸索損傷による高次脳機能障害と診断。奈良高次脳機能障害支援センターの紹介により、高次脳機能障害に対する訓練目的で当センターを利用。当施設で訓練を提供するとともに、障害者年金手続きのサポートを実施。経済面での懸念材料が払拭されたこともあり、就労に向けて、就労継続支援B型事業所へ進むことを決定。退所後は就労継続支援B型作業所を利用。				
支援の概要	連携先	相談支援事業所及び就労継続支援B型作業所				
	支援のきっかけ	相談支援事業所の相談支援専門員からの相談				
	支援内容	①就労継続支援B型作業所での作業道具を変更したところ、変更理由等を説明しても受け入れてもらえない。高次脳機能障害を受け入れたことが今までなかったので、どのように対応すれば良いのかがわからない。今回のことは、どのように説明すれば良いのか助言してほしい。 ②上記の事象が起きてから、職員との関係性が変わった。当センターのケース担当であれば、話をするとご本人が望んでいるので、支援会議に参加してもらいたい。				
	結果	高次脳機能障害の症状や特性を説明し、高次脳機能障害の理解を深め、支援スキルを伝えた。また、支援会議に参加し、関係性の改善の一環として、支援機関の再構築を図り、支援体制を整えた。				
モデル事業により可能となった支援のポイント		モデル事業の地域連携支援中で、自立訓練利用終了者の相談に対応できる体制を整備したことで、今回の事例に関わる事になった。自動車事故被害者の中には、加害者への怒りやライフプランの意図せぬ変更などにより、感情面での課題（易怒性やうつ傾向）を抱え、支援機関や支援者の変更に時間がかかり、支援ネットワークが広がりにくいことがある。高次脳機能障害支援センターだけでなく、自立訓練利用時のケース担当が地域の事業所の橋渡しとして、高次脳機能障害の地域での受け入れ体制を構築する一助となったと考える。				

5. モデル事業による自動車事故被害者に対する支援事例

かがわ総合リハビリテーションセンター（成人支援施設）

事例		地域連携支援				
事故被害者の概要	性別	男性	家族構成	（同居）両親 （別居）兄弟		
	年代	30代	障害者手帳	精神障害者保健福祉手帳2級	障害支援区分	無し
	事故から現在までの経緯	交通事故にあい急性期病院へ搬送され入院。左頚骨観血的手術、減圧開頭術、頭蓋骨形成術をそれぞれ別日に施行。 回復期リハビリテーション病院へ転院 退院し、県外で復職。復職したが、体調の関係で離職し実家のある香川県へ戻る。 支援を受けて短時間の仕事に就くが、生活リズムの乱れや意欲低下があり離職。 自立訓練を利用開始。 自立訓練利用開始から1年10か月後、就労継続支援A型事業所に就職し現在に至る。				
支援の概要	連携先	相談支援事業所及び就労継続支援A型事業所				
	支援のきっかけ	相談支援事業所の相談支援専門員からの相談				
	支援内容	①「高次脳機能障害が悪化しているのではないか」と就労継続支援A型事業所、本人共に不安がある。主治医に再検査を依頼しても良いものか助言が欲しい。 ②医療機関で再検査をしてもらうことになった場合、医師からの説明はあると思うが、検査結果を事業所で活かすために生活の場に落とし込んだ見立てを聞きたい。その場合、検査結果の説明を聞いたことが無い支援者が同行するのでは不安があるため同行して欲しい。 ③本人の障害特性に合った仕事内容を助言して欲しい。				
	結果	就労継続支援A型事業所での作業内容や職員による生活面の確認事項を一部変更し、就労継続に繋がっている。 また、就労継続支援A型事業所、相談支援事業所が直接医療機関と連携が取れるようになり、各事業所の高次脳機能障害の支援スキルが高まった。				
モデル事業により可能となった支援のポイント		R5年度よりモデル事業の中で加配職員1名を配置し、自立訓練利用終了者や自立訓練利用対象と見込まれる入院中の患者等の相談に対応できる体制を整備したことにより、地域の事業所で高次脳機能障害者の受け入れを広げるために自立訓練利用中以外の方の支援を実施することができた。				

5．モデル事業による自動車事故被害者に対する支援事例

広島県立総合リハビリテーションセンター　あけぼの

事例		自立訓練提供支援（生活介護）				
事故被害者の概要	性別	女性	家族構成	（別居）弟・妹（県内）姉・兄（県外）		
	年代	50代	障害者手帳	身体障害2級	障害支援区分	4
	事故から現在までの経緯	20歳の時、短大通学中に交通事故の脳挫傷で1カ月間意識不明。学校を除籍し、自宅で20年間過ごす。基本的に何でもできるが、受傷後、自発性が低下して、自宅では何もせず起きている間はテレビをみたりして布団の上で過ごす、昼夜逆転生活で夜の10時から4時まで入浴し、何度も湯を沸かして近所迷惑になっていた。こだわりが強く、同じ物しか食べず、菓子やジュースが主食、暴言や家庭内暴力による母親のあばら骨骨折などがあり、弟が社協に相談し、社協から当施設に連絡があり入所（生活介護）となる。施設入所後も昼夜逆転生活が続く。入浴を拒否することが多い。布団の上でテレビを見たり、ボードゲーム（オセロ等）をして過ごす状況が13年間続くが、2年前から生活リズムが改善され、軽作業に参加できるようになり、グループホームへの移行が現実的になってきている。				
支援の概要	連携先	相談支援事業所				
	支援のきっかけ	社協からの相談				
	支援内容	①生活リズムを整える 当該利用者の抵抗があったが、夜中にテレビをみることを止めて（テレビの電源コードを消灯前に預かる）、日中活動（ボードゲーム・本）に参加する。 入浴の定例化。身なりの改善（衣類をジャージから上下別々の服へ、スリッパから靴へ変更） ②自発性の低下により、声掛けが必要などの課題はあるが、能力的に大きな問題はないことから、地域（グループホーム）移行。日中活動の場として作業所等に通う。 ③施設入所にこだわる家族への働きかけ。				
	結果	2年前くらいから、夜中のテレビ視聴対策として、テレビの電源コードを預かることにより、昼夜逆転生活が改善され、入浴拒否もほぼなくなった。令和6年9月から、生活訓練の軽作業への参加を開始し、外出訓練、買い物訓練、調理自習等を行った。				
モデル事業により可能となった支援のポイント		今でも年上や同年代の職員の言うことに反発することが多いが、5人兄弟の真ん中で、弟・妹の面倒を見ていたからか、30代前半より若い世代の職員の言うことは比較的聞く傾向（お願い的な依頼）があったことから、ケース担当を若い世代の職員に代えたこと、組織的に対応したこと、モデル事業により配置したOTが外出訓練等への援助を行い、当該利用者との関係性を深めたこと。また、モデル事業により、他のリハビリテーリングセンターの訓練状況を視察し、生活介護から生活訓練への移行についての状況を学ぶことができたことも、支援の参考になった。 入所から10年を超えてから、生活訓練への移行が現実的になってきた。本人の主訴は自宅復帰（ハードルは高い）であるが、家族は自宅生活時のこともあり、とにかく施設で生活させたいとの意向があり、家族の意識改革が最大の壁とも言える。施設入所から10年以上変われなかった（職員も変わらなかった）方であるが、重度の自発性の低下があっても、高次脳機能障害者へのアプローチをあきらめないことも重要であることを再認識させられた。				

5．モデル事業による自動車事故被害者に対する支援事例

ダイアリー

事例		自立訓練提供支援				
事故被害者の概要	性別	男性	家族構成	（同居）両親（別居）姉一家、妹		
	年代	40代	障害者手帳	身体障害2級	障害支援区分	なし
	事故から現在までの経緯	・小学校4年生の時、自転車で友人と遊んだ帰りに交通事故に遭い脳挫傷、外傷性くも膜下出血発症。1ヶ月半意識障害。右上下肢に軽い麻痺残存。事故から1年2か月間は2か所の病院にて、治療、リハビリ、再手術、リハビリを繰り返し入院生活を送った。 ・知的な低下を認め、中学校は養護学校を卒業し、定時制高校、専門学校を卒業。 ・事務仕事や工場で働くが長続きせず、アルバイト先で同僚に突き飛ばされ、頭部の人工骨にヒビが入り、再手術が行われた。 ・その後はほとんど自宅での生活となり、20歳ごろから飲酒をするようになっていった。 ・20歳代後半から精神的に不安定になり、精神科に通院するようになった。鬱的状態、アルコール依存症の診断。 ・30歳ごろからさらに飲酒量が増え、父親と口論になったり、暴力行為が頻回に見られるようになっていった。 ・30歳代後半の頃断酒をしたが、不安感、不眠、手指の振戦が出現し、2カ月間入院となった。しかし、退院した2日後に興奮状態となり、警察が精神科救急情報センターに通報し入院となった。 ・退院後は、精神科の治療を続け、精神科デイケア、就労継続支援事業所などを利用しながら在宅生活を続けていた。 ・40歳代後半の頃、飲酒量がアップし、救急搬送され入院となったことをきっかけに、市の依存症相談拠点機関が関わるようになり、専門的治療を開始した。 ・その後、依存症相談拠点機関からの相談をきっかけに、機能訓練の利用を開始。精神科訪問看護も導入し、現在に至る。 ・現在、飲酒量がアップし、肝機能の低下など他の病気も指摘され、検査が行われている。				
支援の概要	連携先	相談支援事業所				
	支援のきっかけ	依存症相談拠点機関の精神保健福祉士からの相談				
	支援内容	①事故の影響で右手の使いにくさもあり作業に乗りにくいが、就労系の事業所で十分に配慮されず辛い思いをしてきた。PT・OTがいて、身体も高次脳も見られるダイアリーなら丁寧に関わってくれるのではないかと、依存症相談拠点機関からの依頼あり。身体面の評価をしつつ、対象者との関係作りを行っていった。 ②父親が送迎を行うことで、休まず通所が可能となった。さらに、父親の不安、悩み、迷いなどを送迎時にうかがうことで医療機関への受診のタイミングや、対象者への運動指導を伝えることができている。 ③飲酒量の増加と肝機能の低下に対しては看護師、運動不足に対してはPT、攻撃性や意欲低下、自暴自棄になる言動、行動に対してはOT、STが介入し、生活や家族も含めトータルなサポートを実施している。				
	結果	足の痛み、酸素量の不足などの身体症状に対して受診を行うことが可能となったが、飲酒量の増加を十分に把握できず、精神科訪問看護との連携が必要となっている。自主トレの指導、グループ訓練での他者とのコミュニケーションを通して、易怒性、攻撃性なく過ごすことができている反面、自暴自棄な言動や行動への支援は効果が得られていない。				
モデル事業により可能となった支援のポイント		R5年度よりモデル事業の中で公認心理士の資格を持つSTを配置したことで、OTだけのプログラムから広がりを持たせることができている。対象者がもともと通っていた就労継続支援B型事業所の訪問を通して、対象者が何故利用を終了してしまったかを直接聞くことができた。訪問を通して機能訓練終了後の連携先を増やすことができ始めている。				